Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

1947～1955年における夜間中学校と生徒の基本的特徴(後篇)

草, 京子
浅野, 慎一

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,12(1):47-65

(Issue Date)
2018-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010560

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010560

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第12巻第１号　2018

研究報告

1947～1955年における夜間中学校と生徒の基本的特徴（後篇）

Basic Characteristics of Night Junior High Schools and their Students between 1947 and 1955（Part 2）

草　京子*　　浅野　慎一**
Kyouko KUSA*　Shinichi ASANO**

要約：本稿の課題は、1947～1955年の日本における夜間中学校とその生徒の基本的特徴を、各学校レベルに降りて把握することにある。本稿でいう基本的特徴とは、まず各学校の①名称、②所在地（市町村）、③開設年月日、④1955年度以前に閉鎖された場合、その年月日と理由、⑤所在地域の特徴、そして生徒の⑥入学者数、⑦在籍者数、⑧卒業者数、⑨性別、⑩年齢、⑪就労状況等を指す。なお、こうした最も基本的な特徴さえ、そのすべてが把握しうる学校はごく少数である。それは、本稿の対象時期が戦後の混乱期、新制中学校の萌芽期であったという一般的事情に因るだけではない。当時、文部省や多くの地域の教育委員会は、夜間中学校が児童労働の容認・六三制の破壊につながるとみなし、開設を認めなかった。そこで少なからぬ夜間中学校が、不就学・長欠者の蔓延という現実への対処策として半ば非公式に開設・運営され、公式の記録も作成・保存しなかったのである。しかも1955年度以降、夜間中学校の閉鎖が相次ぎ、多くの史料が散逸した。本稿では現時点で入手し得た史料に基づき、各学校とそこでの生徒の実態を可能な限り、把握する。

第９章　兵庫県

新学制が開始された1947年以降、1955年度までに、兵庫県には28の夜間中学校が存在したとされている。都道府県別に見れば、この数は全国の中でも抜きんでている。

【神戸市立駒ヶ林中学校特殊学級】

兵庫県で最も早く夜間学級が開設されたのは、記録の上では神戸市立駒ヶ林中学校の「特殊学級」である[1]。

同学級の開設日は、同校「学校沿革史」をはじめ、ほとんどの史料で1949年２月10日[2]とされ、同日、神戸市教育委員会の認可を受けている。

しかし、市教委に認可される以前に、教員が自主的に夜間学級を開設していた可能性がある。その根拠のいくつかを挙げる。

一つは、東京都の足立区立第四中学校夜間学級を開設した同校校長・伊藤泰治氏が駒ヶ林中学校を1951年に視察し、「熱心な担任の先生がホーム・ルームの子供達のうち、家庭の都合で町工場などに勤めるようになった不就学者を救うために、夜間学校に集めて補習的な授業を継続し、卒業期まで持って行った。後になって神戸市教育委員会がこれを公認して、初めて夜間学級の誕生をみたのである」[3]と記していることである。

もう一つは、1959年に駒ヶ林中学校に赴任した末吉富久男氏が、1947年当時の教員から聴き取ったこととして、次のように述べていることである。「家業の手伝いや就労して家計を助け、毎日の登校が無理な生徒が二〇名ほどいることが判ったのです。そこで『夕方、それらの生徒を集めて勉強してみようやないか』と始まったのが二十二年であったわけです。そして当時の中井順三校長が『教育委員会にこそこそやるのは、教員の勤務上、具合が悪い』ということで、昭和二十四年二月一〇日に神戸市教育委員会の許可を得て、正式な夜間学級が始まったのであります」[4]。

なお駒ヶ林中学校は1950年２月に神戸市立長楽小学校から現校舎に移転しており、夜間学級も当初は、長楽小学校に開設されたと推測される。

開設当初から数年間、駒ヶ林中学校夜間学級は、他の校区の長欠・不就学生徒の入学を許可していなかった。しかし、1954年度から夜間学級への教員配当が打ち切られたこと等の事情によって、神戸市内の夜間学級が閉鎖されるに伴い、校区外の生徒の編入を認める事例が増加してくる[5]。

同校所在地域について、新聞名・日付は不明だが1949年の記事[6]に「管下に漁師町、場末工場の細民街を控え…（中略）…暮らしが困りゴム工場などに働きに出なければならぬため学校に行けない」子供が多かったと記されている。また《1970-1-62》は、「とくに漁師町の子どもたちが不就学になるのをみかねて」開校したと述べ、《1971-1-37》は「当時校区内には生活困窮のため昼間ゴム工場で働き学校を長欠する学齢生徒が多数にのぼっていた」と記す。《1963-1-101～102》は、被差別部落の存在に言及している。

在籍者数については、前掲の新聞記事（1949年）が「二月一日二十三名を集め」て授業を始め、開設１カ月後には「四十三人（男二十名、女二十三名）に増し」たと記している。その後の在学者数は各年度概ね50～70人、卒業者数は20～28人である（表20・21）。

生徒の職種は、鉄工所・ゴム工場・釣針製造等の製造工、及び、

*　元夜間中学校教諭
**　神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

（2018年３月31日　受付
2018年４月９日　受理）

表20　在籍者・性別（兵庫県）

年度		1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
駒ケ林	計	44	70	64	70	51	50	―	《1954-1-109》
	計	60	82	71	―	―	―	―	《1954-1-109》
丸山	男		―	22	62	47	40	45	《1975-3》
	女		―	40	32	16	23	38	
	男		60	―	―	29	―	43	《1977-1》
	女		63	―	―	43	―	16	
	男		46	51	60	42	42	42	《1957-1-508》
	女		60	56	50	60	51	43	注１
	計		114	62	94	63	63	83	《1975-3-1》
	計		123	114	68	102	93	98	《1977-1》
	計		106	107	110	102	93	85	《1957-1-508》注１
布引	男		29	35	29	26	15	18	《1958-3-485》
	女		20	32	40	39	45	34	
	計		49	67	69	65	60	52	
小田南	計		52	35	39	39	60	52	《1974-1-757》
大庄東	男			40	22	―	15	―	《1954-7-3》
	女			22	9	―	14	―	
	計			66	31	―	29	―	
	計			56	41	37	32	29	《1974-1-757》
昭和	計			10	10	16	11	11	《1974-1-757》
城内	計			22	47	46	46	18	《1974-1-757》

注１：中学校のみ。

表21　卒業者（兵庫県）

年度		1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
駒ケ林	計	24	36	21	28	20	―	―	《1954-1-109》
丸山	男		20	10	13	6	19	7	《1968-1-24》
	女		8	11	8	3	10	9	
	計		28	21	21	9	29	16	
	男		20	5	14	6	9	7	《1986-1》
	女		8	16	8	3	8	9	
	計		28	21	22	9	17	16	
布引	男		―	7	11	11	8	7	《1958-3-485》
	女		―	2	10	9	10	13	
	計		―	9	21	20	18	20	
大庄東	男			1	6	15	―		《1954-7-18》
	女			1	2	6	―		
	計			2	8	21			
由良	男			6	11	4	6	7	《1956-2》
	女			―	2	―	5	1	
	計			6	13	4	11	8	

米配給所・饂飩屋等の店員が多く見られる（表23）。

【神戸市立大橋中学校夜間部】

次に、県内で２番目に開設された大橋中学校「夜間部」[7]を見ていく。

開設年月日は、1949年９月５日、及び、1950年４月１日とする史料が多い[8]が、同校の「学校沿革史」は学校創立以来、詳細な記録がリアルタイムでなされており、そこに記載された1949年９月５日が妥当な開設日と推定しうる。《1958-2-3・10》で夜間部開設時の有利秀一校長は、「不就学生徒のため夜間を始めたのも市内で一番先」、「夜間校も駒ヶ林中学校より早くつくり数十人の生徒の救済にあたり」と述べている。ただ、それを示す史料は他には入手し得ていない。

大橋中学校は創立時、独立校舎がなかったため、神戸市立神楽小学校で開校の予定であった。しかし「学校沿革史」によれば、当時、神楽小学校内には「西神戸朝連初等学院」と「朝鮮建国国民学校」という２つの朝鮮学校があったため、大橋中学校は別の小学校と神楽小学校の２校に分かれて授業を行っていた。朝鮮学校閉鎖後、1953年度末に独立校舎に移転するまで、大橋中学校は神楽小学校にあり、夜間部も同小学校に開設されたと推測される。

同校「夜間部」の閉鎖日は、1953年12月31日、1955年３月15日、1952年等、史料によって多様な記載がある[9]。《1975-1-1082》は、「夜間学級の生徒が少くなり、駒ヶ林中夜間学級の学級増もあり廃止にいたる」と同校からの回答を記す。ただし1953年度に駒ヶ林中学校夜間学級の学級数は増加しておらず、翌1954年には１学級に減少している[10]ことから、閉鎖の理由は不明である。

《1975-1-1082・1091》は、1953年度の在籍者を約10人、卒業者を開設期間中の総数で約23人としている。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【神戸市立丸山中学校西野分校】

神戸市内で次に開設されたのは、現存する夜間中学では最も長い歴史をもつ、丸山中学校西野分校である。

同分校は当初、「丸山中学校・室内小学校の西野分教場」と称され、「番町地区改善対策委員会の教育部の改善事業として」、西野幼稚園園舎の一部を借用して開設された[11]。

開設日は、1950年１月16日とする史料がほとんどだが、同年１月15日、２月16日、そして1949年４月１日等の日付も散見される[12]。

所在地域について、《1968-1-3》《1968-2-A1・A5》は「日本最大の同和地区といわれる番町地区」と述べ、1960年代についてだが「マッチ産業のあとに栄えたゴム産業も低賃金労働者を得やすいこの地区の周辺に集まっている。ゴム工（臨時工）のほかに人夫・手伝・土方・仲仕等の日雇労務、市の現業員（主として清掃局）、失対人夫、製靴修理等が大部分を占め、無職（生活保護）も多い」と記している。

《1968-1-17》は、西野分教場が「丸山中学校、苅藻中学校、兵庫中学校の三中学校と、室内小学校、御蔵小学校、水木小学校の三小学校に在籍する生徒児童中、番町地区内の不就学生で小学校四年生以上を対象とするもの」であり、開設当時の入学者数は、中学生106名、小学生38名、計144名であったとしている。《1969-1-46》は、「昭和25年１月16日開設された本校に、入学してきた児童・生徒の数は149名」と記す。翌年からの中学生の在籍者数は85～110人、卒業生数は６～29人である。

生徒の性別は年度によって異なるが、《1975-2-507》には「昭和三〇年度ごろまでは男子の在籍が圧倒的に多かった」と記されている。生徒の年齢は確認し得ていないが、《1969-1-46》は、当該時期の在校生のほとんどが、就学適齢者だったと記している。

生徒の就業状況は、1956年度の史料だが、92人中、就業者が70人、そのうちゴム会社が25人、家事手伝が15人、製靴７人、その他、鉄工・ビン会社・製箱・自動車修繕・靴磨・切符売・子守・屑買・風呂屋等である[13]。また、《1968-1-11》には不就学になる理由の一つとして「就職（ゴム工・靴見習・屑屋・手伝等）」との記載があり、前述の地域概況も踏まえれば、1955年度以前も、ゴム・靴等の製造工、及び、都市雑業層が多かったと思われる。

【神戸市立布引中学校夜間学級】

次に、神戸市立布引中学校では、後の時期の史料での名称だが「夜間学級」[14] が開始された。

開設日は、1950年４月１日、及び、同年４月10日とする史料がある[15]。また、《1975-1-1083》には1949年11月10日との同学級からの回答が掲載されている。その他、《1958-3-484》は、1950年４月とのみ記載している。なお、《1975-1-1082》には「昭和25年12月１日南地区夜間分校開所式」と記載されているが、これ以外に「南地区夜間分校」について記した史料は確認し得ていない。

布引中学校も創立時は独立校舎をもたず、神戸市立二宮小学校を仮校舎として1948年に発足する。しかし、翌年には市立小野柄小学校へ移転する。したがって、布引中学校夜間学級は小野柄小学校で開設されていたものと推測される。

《1975-1-1082》は、同学級が「未解放部落出身生徒の就学を保障するため」のものであるとし、《1963-1-101～102》も被差別部落の存在に言及している。

《1958-3-485～486》によれば、在籍者は各年度49～69人、卒業者は1951年度以降、９～21人である。生徒の性別は、開設当初は若干男性が多かったが、年度を追う毎に女性の比率が増している。「その理由は父母その他家族が就労するために家の留守番、子守りを託したり家内手工業的内職をするには女子の方が都合がよいため」とされている。

年齢は、1953年度の在籍者はほとんど学齢だが（表22）、《1958-3-486》はやや後の時期について「義務教育未完了のまま就労していた者がいつしか年齢を超過し、更に就職試験などの何かの必要に迫られ資格を得るため夜学に入学する者が毎年数名あって（満十六歳～二十歳位）不自然な姿であったが現在は年齢構成が大体一定し」てきたと記す。《1978－2-484》も「当時は約五十名の生徒で学歴年令も区々であり、学齢超過の者も相当あっ」たと述べる。開設から数年は学齢超過者が一定数在籍していたが、徐々に減少し、学齢者が多数を占めるようになったようである。

生徒の職種は、当時の神戸市の特産品であったクリスマス飾物をはじめ、各種製造工が大きな位置を占めている。

【神戸市立須佐野中学校夜間部】

須佐野中学校「夜間部」は同校「学校沿革史」によれば、1950年７月15日に「夜間部が設置され（校舎）は浜山校、その開設式が行われる（於 浜山校）」と記載されている[16]。「浜山校」は、校区の浜山小学校と思われる。名称については《1975-1-1083》には「夜間学校」と記されている。

同校「夜間部」は、1954年３月31日[17]、「家庭生活や私経済が次第に好転した結果、自然消滅の形」[18] で閉鎖されたという。

在籍者数は《1954-2-14》によれば1953年度27人、卒業者は《1975-1-1082》によれば開設中の総数で27人であった。

生徒の性別・年齢・職種は確認し得ていない。

【神戸市立太田中学校たんぽぽ教室】

太田中学校の夜間学級は通称「たんぽぽ教室」または「タンポポ教室」であった[19]。

開設日は史料によって異なり、1951年２月１日、同年２月７日、同年４月１日等の記載がある[20]。ただし、《1968-3-25・40》に「昭和二六・二・一、夜間学級タンポポ教室始まる。生徒三名。昭和二六年度四月一日、夜間学級設置される」とあり、また同教室を担当した若山惣一郎が「初めに開いたのは二十六年の二月一日頃からです。二月に始まって一時、閉鎖されかかって正式に市への届けは四月からです」と述べている。また《1997-2-127》は、1951年２月１日に「夜間学級タンポポ教室開始」、同月４月１日に「夜間学級設置」と記す。太田中学校には当時、独立校舎がなく、校区内の大黒小学校に併置された。したがって、「たんぽぽ教室」も夜間学級も大黒小学校に開設されたと推測される。

閉鎖については1953年４月30日、1954年３月31日等とする史料がある[21]。《1975-1-1082》は閉鎖理由を、「３年間で卒業させたら閉鎖するという建前と、生徒30名以上いないと市の認可と補助が出ない、残生徒３名は駒ヶ林中夜間へ」と記している。《1968-3-39～40》で若山は「実際には一年延ばしの二十九年の三月まで…（中略）…開設した。…（中略）…昭和二十九年三月、『たんぽぽ学級』の最終となった第四回目の卒業式を迎えた。いよいよこれで『たんぽぽ学級』も閉鎖である」と述べ、また別の箇所では「二十八年四月三十日まで足かけ四年」と語っている。

所在地域について《1968-3-52》で若山は、「（不就学生徒の：筆者注）ほとんどは、昼間ゴム工場で働いていたり、病人の看病をしていたりした」と記している。

表22　在籍者・年齢（兵庫県）

年齢		12～15	16～19	20以上	計	主な史料出所
布引	1953年度	62	3	－	65	《1953-5-490》
小田南	1953年度	39	1	－	40	《1954-6-1》
大庄東	1954年度	24	3	－	27	《1954-7-4》
		26	5	－	31	

表23　主な職種（兵庫県）　（人）

			主な職種	主な史料
駒ヶ林	1950年度		工員見習い(24)、店員見習い(6)、給仕(1)、家事雑事(10)	《1954-1-112》
	1954年度		工員見習い(10)、店員見習い(16)、家事雑事(2)、その他(2)	
	1954年度	男	鉄工所工員見習(3)、綿工場店員見習(2)、ゴム工場工員見習(2)、大工徒弟(2)、釣針製造所雑役(2)、米配給所店員見習(4)	
		女	饂飩屋店員見習(2)、普通家庭子守(2)、ゴム工場工員見習(3)	
布引	1953年度		手工業(13)、工員見習(6)、他家手伝(3)、靴修理(3)、店員(2)、フイルム運び(2)、手伝（男）(2)、無職(29)	《1953-5-491》注１
	1954年度		クリスマス飾物(10)、鉄工員(5)、製菓工(6)、製箱工(5)、ゴム工員(4)、新聞配達(3)、店員見習い(4)、靴磨き(2)、飲食店その他(5)	《1958-3-485》
小田南	1953年度	男	工員(7)、運搬(6)、自営業手伝(2)	《1954-6-23》
		女	工員(5)、販売(4)、子守(1)	
	1953年度	男	物品運搬(7)、工場勤務(4)、物品販売(3)	《1974-1-757》
		女	物品販売(4)、子守(2)	
大庄東	1954年度	男	箱修理工(7)、青物商家業手伝(1)、洗濯業見習(1)、寿司屋店員(1)、新聞配達(1)	《1954-7-7～8》(記載ありのみ)
		女	佃煮製造工(1)、饂飩屋店員(1)、飲食店店員(1)	
	1954年度	男	箱作見習(8)、家事手伝(2)、家業手伝(以下、1)、運搬工、新聞配達、洗濯屋見習、八百屋店員、	《1954-7-14～15》
		女	家事手伝(12)、佃煮工(1)、飲食店店員(1)	

注１：複数人数が就労する職種を記載。

生徒数については、《1968-3-39・52～53》で若山は「(開設当日：筆者注）来たのは三人でしたかね。…（中略）…しまいには少ない時には七人来たり、多い時には十人来たりして、年々三人卒業したり四人卒業したりして四年程で二十五人卒業しました。その時は公認でなかったんです」と語り、「(昭和26年２月授業開始日：筆者注）当日ふたを開けてみると、来た生徒は七名きりであった。…（中略）…この中からはじめての卒業生が二人出た。(昭和26年：筆者注）生徒は十二三人に増えた。…（中略）…この間卒業生二十四名」とも述べている。なお、《1954-2-14》によれば、1953年度の在籍者数は20人である。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。ただし《1968-3-39～40》で若山は「生徒達は昼間はたいていゴム工場で働いていたり、屋台をひっぱって夜店で働いていました」と語る。

【神戸市立玉津中学校特殊学級（夜間）】

神戸市立玉津中学校「特殊学級（夜間)」は、同校「学校沿革史」によれば、1951年９月14日、開設始業式を迎えた。「学校沿革史」には、「夜間学級」との記載もある。

開設場所は《1953-6-494》に「小学校を借りている」との記述があるが、小学校名は不明である。玉津中学校は1947年に玉津第一小学校を仮校舎として開校し、1949年に現校舎に移転した。「特殊学級（夜間)」のみ、小学校を借りていたものと考えられる。

なお《1963-1-101～102》は、同校所在地が被差別部落を含むことを指摘している。

《1954-2-14》によれば、1953年度の在籍者は103人である。

《1953-6-492》では、「家庭貧困なるために昼間雇傭されている」者が47人、「雇傭されていないが家の留守番子守等をしているために長欠生になり又なろうとしているもので、夜間学級に在籍している」者が52人と記している。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。

【神戸市立住吉中学校夜間学習】

神戸市立住吉中学校の「夜間学習」は、1952年４月１日に開設された[22]。

同校は当時、住吉小学校に併設されていたため、「夜間学習」も同小学校に開設されたと考えられる。

住吉中学校は1955年に新校舎に移転したが、同年12月31日に「夜間学習」は閉鎖されている[23]。《1975-1-1082》は、閉鎖が1954年度で「正式に許可されなかったため」と記している。

《1975-1-1085・1091》によれば、1953年度の在籍者数は約100人、開設中の卒業者総数は約300人といずれも多い。

生徒の性別・年齢・職種は確認し得ていない。

【神戸市立鷹取中学校（名称不明）】

神戸市立鷹取中学校の夜間学級の正式名称は、それを確認しうる史料は未入手である。

《1964-1-437》等によれば、1952年４月６日に開設され、1954年３月31日に閉鎖された。ただし、鷹取中学校を主体とする史料の中に、夜間学級の記載は見つからず、さらに調査が必要である。

生徒の人数・性別・年齢・職種も確認し得ていない。

【神戸市立花園中学校夜間学級】

神戸市立花園中学校の「夜間学級」[24] は、1954年４月26日に開設された[25]。

《1954-5-482・483》は「夜間学級」開設の前年度に書かれたものだが、不就学生徒について「男子三十四名、女子二十五名、合計五十九名」、年齢別では「十四歳のもの十三名、十五歳のもの二十名、十六歳以上のもの二十五名」としている。その内、就労している者は、男子は「工員七名、家業手伝九名、仕事の見習徒弟四名、日雇い八名、其の他六名」、女子は「工員六名、子守家の留守番八名、日雇い五名、其の他六名」である。

「夜間学級」開設中の生徒の人数・属性は確認し得ていない。

【神戸市立上野中学校（名称不明）】

神戸市立上野中学校は、《1954-4》の「現在夜間学級開設中学校及び将来夜間学級開設計画中の中学校」として案内状が出されているが、同年12月の「全国中学校夜間部教育研究協議会兵庫県支部名簿」には記載がない。《1954-8》の設置校一覧にも、記載されていない。開設の有無も含め、さらに調査が必要である。

【尼崎市立小田南中学校特殊学級】

尼崎市内では尼崎市立小田南中学校に、最初に「夜間特殊学級」が開設された[26]。当時の史料に、「夜間学級」[27] の呼称もみられる。

開設日は1950年４月１日、同年５月４日、1951年９月１日等、史料によって相違がある[28]。

所在地域について《1954-2-24～25》は、「工業都市としての尼崎市の市民構成は零細な勤労者層が多数を占め、特に本校区内にはその傾向が顕著である。これに加うるに敗戦後の経済状況の激動のため本校区内には相当多数の不就学生徒が○出した」と記している。

《1974-1-754》によれば、「五月一日生徒を召集したところ二七人が出席した。五月四日、…（中略）…開設式をおこない、授業を開始」し、「二六年三月には二十数人が修了式に臨んだ」という。在籍者数は各年度35～60名を推移している。卒業者数は確認し得ていない。

生徒の性別は、《1974-1-755》が1950年度の在籍者について、男性29名、女性23名、計52名と記している。《1954-7-78》は1954年度の在籍者は男性21人、女性31人としている。この限りで見ると、特に傾向的な偏差はない。

生徒の年齢について、《1974-1-755》には、開設当初、「日がたつにつれ校区外の生徒や年齢超過のものまでが入学を希望」と記されているが、1953年度の在籍者はほとんどが学齢である[29]。

生徒の職種は1953年度については、男性が物品運搬・工員、女性は物品販売・子守が多く見られる。

【尼崎市立城内中学校夜間学級】

《1974-1-757》は、「二六年度は城内・昭和・大庄東中学校に（夜間学級を：筆者注）各一学級を新設」と述べている。

まず、尼崎市立城内中学校「夜間学級」[30] について見る。

開設日は史料によって多様で、1951年４月（日付記載なし)、1951年６月11日、1952年４月（日付記載なし）等がある[31]。

同校の所在地域について、《1954-2-119》は、「工場地帯を控え

ている関係上各種の工員家庭が大部分を占め、その出身地も日本全県を網羅し…（中略）…低額給料者である上に家族数も多く貧困家庭が非常に多い。加うるに各種工場の整理による失業者は誠に憂慮すべきことである」と述べている。

在籍者数は、開設の翌年の1952年度から46～47人が続いたが、1955年度は18人と激減した[32]。卒業者数は確認し得ていない。

生徒の性別は、《1954-7-78》によれば1954年度の在籍者は男性８人、女性22人と女性が多いが、これが恒常的傾向か否かは確認し得ていない。生徒の年齢・職種も確認し得ていない。

【尼崎市立昭和中学校夜間学級】

尼崎市立昭和中学校「夜間学級」[33] の開設日は、1951年６月26日、同月11日等とする史料がある[34]。

在籍者数は10～16人で推移している[35]。

卒業者数は、確認し得ていない。

生徒の性別は《1954-7-78》によれば、1954年度の在籍者では男性が９人、女性が７人である。年齢・職種は確認し得ていない。

【尼崎市立大庄東学校夜間特殊学級】

尼崎市立大庄東中学校に開設された「夜間特殊学級」には「夜間学級」との表記も見られる[36]。

開設日は1951年４月（日付記載なし）、及び、同年６月11日とする史料がある[37]。《2000-1-113》《2004-1-116》は、同学級が1955年度に閉鎖されたと記す。

同校の所在地域について、《1954-7-1》等は「同和教育対象地域を内包し、且つ工都尼崎に於いても特に労働者階級を主とするため家庭貧困者多く、開校当初には不就学者が1割に及んでいた」と記している。

在籍者は開設年度の1951年度が最も多く、翌年から徐々に減少し、卒業者については逆に、1951年度は２人だったが、1953年度には21名に増加している[38]。

在籍者では、1951～1952年度では男性が多かったが、1954年度では性別に特に偏差はない。

年齢について見ると《1954-7-3》は、「（1951年）当初はよせあつめ的学級であり、年齢や学歴が種々であり18,9才の者や13才の者、高校在学者や小学２，３年程度の者等、雑然とした中に出発」したと記している。そして、1954年度では15歳以下の学齢者が多いものの、15歳で１年生２年生に在籍する生徒もおり、進級後は学齢超過者が多数を占めたものと考えられる。

生徒の職種は、男性では箱修理工が多いのが特徴的である。《1954-7-45～46》では、「箱造工は規制労働者で一定の職場を持たず労務提供者である親方に属し、夏期にはビール会社、冬期には酒会社という様に移動している。…（中略）…仕事の無い時には学校へ来るか、闇食品の運搬をやっている」と述べている。また女性では家事手伝が多く見られるが、《1954-7-46》では、「住込、それも飲食店か、パチンコ屋である…（中略）…就労していない女子生徒は留守の家事手伝に従事」していると記す。

【尼崎市立明倫中学校夜間学級】

尼崎市立明倫中学校「夜間学級」[39] は、1952年４月７日に開設された[40]。

在籍者数は、《1974-1-757》によれば1952年度は10人、1953年度が13人、1954年度は９人だが、《1954-7-78》によれば16人である。卒業者数は確認し得ていない。

性別は、《1954-7-78》によれば1954年度の在籍者は男性が８人、女性が８人である。年齢・職種等は確認し得ていない。

【西宮市立大社中学校芦原分校・夜間特別学級】

《1952-1-117》は、西宮市立大社中学校が「芦原小学校下に夜間特別学級」を設けたと記している。また《1954-2-14》は、同中学校「芦原分校」が、芦原小学校内に開設されたと記す[41]。《1960-1-42》は、長欠児童の「大半が芦原地区に集まっていたのである。そこでこの地区にある芦原小学校の校舎を一部借用して、大社中学の分校となし、夜間中学特殊学級を開設することになった…（中略）…昭和26年５月21日、入学式となったのが本校の始まりである。その発足当時は83名の生徒よりなり一時は200名を越すこともあったといわれる」と記している。また《1970-3-133～134》も、「とりわけ同和地区に不就学や長欠生徒がかなりいることが実態調査によって明らかになった。…（中略）…夜間中学――実は大社中学校芦原分校の名で開設を決意し、…（中略）…昭和二六年五月二一日のことであるが、市内芦原小学校の２教室を開放して、中学第二学年四五名、三学年四五名が学習することになった」と述べている。

ただし、開設日は1951年５月21日以外に、５月30日、５月10日等と記す史料も散見される[42]。

在籍者数は、1951年の発足当初は83人、1952年は112人、1953年度は100人である[43]。卒業者数は確認し得ていない。

生徒の年齢については、《1975-1-1084》に「不就学生徒で学齢超過者数十名の将来を考慮して中学卒の資格を修得するため。学齢児で昼間就学困難生徒のため」との記載がある。

性別は、《1952-1-119》によれば、1952年では男性36人、女性76人で、女性が多い。

生徒の職種については、やや後年の調査だが、《1960-1-45》が「男子の大部分は箱屋にて重労働をしている」と述べ、その他、ガラス工場・ゴム工場等が見られる。

【伊丹市立南中学校特殊学級】

伊丹市立南中学校「特殊学級」[44] の開設は、1950年８月１日とされる[45]。

《1954-2-14》によれば、1953年度の在籍者数は35人である。

卒業者数、生徒の性別、年齢、職種等は確認し得ていない。

【良元村立宝塚第一中学校夜間部】

武庫郡の良元村立宝塚第一中学校「夜間部」については、《1952-2-67》に次の記事がある。「昭和二十五年六月に特別学級を開設、昼間部は本校において、夜間部は公会堂において授業をしてきた。昼間部は順調に継続してきたが、夜間部は昨年九月三日のジェーン台風の被害甚大で中絶し、不就学のまま経過している」。生徒の人数・属性は確認し得ていない。

【川辺村甘地村組合立神崎中学校甘地校夜間学級】

神崎郡の川辺村甘地村組合立神崎中学校「夜間学級」は、1950年４月（日付記載なし）に開設された[46]。

以下はすべて《1953-2-458・478》によるが、「不就学生徒の殆どが部落生徒」であり、「夜間学級」の開設場所は小谷公民館とされている。同学級は当初、「遅進児教育」を目的に設置されたが、「昭和二七年九月三日より不就学生徒」が登校し、同年10月に協議の結果、「遅進児教育を廃し、不就学生徒教育に」乗り出したという。

在籍生徒数・卒業者数・性別・年齢は、確認し得ていない。

1953年度の不就学生徒は男性７人、女性６人で、その就業状況は、男性では土工が３人・山が３人、商業（手伝）が１人、女性では農業・子守の家事手伝いが５人、工員が１人である。ただし、これら不就学生徒が全員、夜間学級に在籍していたかは確認し得ない。

神崎中学校甘地校の沿革に触れておく。《1997-3》によれば、1947年に神崎郡甘地村立甘地中学校が設立され、1950年に、校舎が川辺と甘地に分かれたまま川辺村・甘地村組合立神崎中学校となった。「夜間学級」が設置されていたのは「甘地校」である。

【姫路市立灘中学校夜間学級】

姫路市では、３校に「夜間学級」が開設された。

まず、姫路市立灘中学校「夜間学級」[47]の開設日は、1952年５月14日とする史料が多い[48]。一方、《1972-1-32》では、「昭和25年９月下旬、小西校長から『夜間学級』開講の計画を聞いた…（中略）…私がその学級担任となったのである。…（中略）…そして10月８日の夜、白浜支所の２階で開講式を行」ったと述べる。

《1972-1-32》は、「10月８日の夜、白浜支所の二階で開講式を行い、…（中略）…二回目は10数名に増え、回を重ねるごとに出席も定まってき」たと述べる。

『神戸新聞（西播版）』（1952年11月６日）によれば、「不就学児童五十四名のうち四十名までが父母とともに塩田作業に従事したり、マッチ工場に働きに行ったりしている…（中略）…粟生小学校の教室を借りて…（中略）…夜間学級を開設」したとしている[49]。

在籍者数は、1952年度は54名、1953年度は52名である[50]。

1952年度の性別は、男性が17名、女性が37名、1952年度の卒業生は31名である[51]。

生徒の職種は、不就学生徒の状況から、塩田作業・マッチ工場で就労していたことが推測される。また、《1975-1-1084》では、「漁やマッチ工場に働く子供が多く」と記している。

【姫路市立山陽中学校夜間学級】

次に姫路市立山陽中学校「夜間学級」[52]について見てみる。

開設日は、多くの史料が1952年９月８日としている[53]。

『神戸新聞（西播版）』（1952年10月３日）は、庄田町公会堂を臨時教室に授業を始めたところ、連日、53～54名の出席者があったと述べている。閉鎖された時期は確認し得ない。

《1954-2-25》は、「不就学長期欠席生徒対策上同和教育との関連をもたせる意味で開設」したと記す。

在籍者数は、1952年度が51人、1953年度が19人とされる[54]。

卒業者数・生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていない。『神戸新聞（西播版）』（1952年10月３日）は、開設時には「十八歳から二十歳の男女九名が聴講生とし受講」と記している。

なお《2016-1-608～609》は「一九四九年二月から城陽小学校内に『特別学級』を設け、…（中略）…当初は一八名であったが、多い時には三〇名に達することさえあった。…（中略）…五二年九月からは週三日間夜間学級を開設した。…（中略）…中には学齢期を過ぎた一八歳から二〇歳の男女も聴講生として参加」していたと記している。

【姫路市立東光中学校夜間学級】

姫路市立東光中学校「夜間学級」[55]は、1952年11月５日に開設された[56]。同学級は、《1975-1-1084》によれば、1955年３月20日、「市からの予算措置なく担当教師昼夜通しの過労で倒れ、生徒の減少により」閉鎖された[57]。

1952年の開設時は、『神戸新聞（西播版）』（1952年11月８日）によれば、同校管内38人の未就学児童中20人が入学した[58]。《1954-2-14》によれば、1953年度の在籍者数は８人である。また《1975-1-1084》によれば、開設期間中の卒業者総数は19人である。

生徒の性別・年齢・職種等は確認し得ていないが、『神戸新聞（西播版）』（1952年11月８日）は「生徒の大部分は…（中略）…個人工場で働いていたもの」と記している。

【由良町立由良中学校希望学級】

津名郡の由良町立由良中学校には「希望学級」が開設された。《1952-3-66》には「特殊学級」とも記載されている。《1956-2》には「分校」との表記も見られ、中学校とは別の場所に開設されていた可能性もある。また、《1975-1-1085》には「夜間学級」と記されている。

なお、1955年３月31日、由良町は洲本市に編入され、以後は洲本市立由良中学校となる。

同学級の開設日は、1950年５月22日、同年９月１日、1953年４月６日とする史料がある[59]。

《1952-3-66》は、「（由良中学校：筆者注）開設当初においては、一部父兄の無理解から、学校へ行くよりも沖へ漁へと走り、為に長期欠席者も生ずる状態であったが、この対策として昭和二十五年特殊学級が設置され『希望学級』と名づけられた。…（中略）…二十六年度には、風雨で不出漁の時は登校する男子も次々に増し、一方女子も子守をしながら出席するようになり…（中略）…不出漁の時は全日或いは午後より四・五名が出席する等不規則な出席状況ではあるがプリントによる学習を最低線として全職員之に当たり卒業した者も数名を数えるに至った…（中略）…二十七年度に入っては、希望学級の生徒数も在籍は二十六名…（中略）…四月中旬に男子三名下旬に男子二名の登校を見るにいたった…（中略）…学令こそ中学三年であるが、小学校一年を修了しただけで、その後は家庭貧困のため鉄屑拾いをして自分の昼食の足しにしたり、衣服を購入したりするような状態であった…（中略）…九名は漁業を扶けており、父兄は夜間授業を希望するので、各方面と種々協議の結果五月下旬夜間学習を開始したのである。ここに希望学級における昼夜別の授業が始まった」と述べている。すなわち、1950年の開設から約２年間、「希望学級」は全日または午後に授業が行われていたが、1952年５月下旬から、夜間学習が始められたものと推測される。

また《1975-1-1084》は、「家の漁業に従事するものが多く、長欠者が続出したため」開設された、と記す。《1975-1-1090》によれば、1953年度の在籍者数は８人、《1956-2》によれば、卒業者は各年度４～11人である。卒業者で見る限り、男性が多い。

生徒の就労先は1956年の調査しか確認し得ていないが、男性はほとんどが漁業、その他に真珠・土工が数人いる。女性は真珠が過半数を占め、子守が数人いる[60]。

【洲本市立洲浜中学校特別夜間学級】

洲本市立洲浜中学校「特別夜間学級」[61] は、1952年５月19日に開設された[62]。

同学級は、1956年３月31日に閉鎖された[63]。《1975-1-1084》は閉鎖理由を「夜間学級生全員卒業のため」としている。

また、《1975-1-1084・1091》によれば、1953年度の在籍者数は５人であり、開設中の卒業者総数は11人である。

年度毎の卒業者数、及び、生徒の属性は確認し得ていない。

【岩屋町立岩屋中学校特別学級】

《1960-2-48》は、「（昭和：筆者注）25年４月から岩屋中学校に特別学級が設置されて、昼　出漁したり、子もりや、留守番や、鮮魚の行商をしなければならない児童生徒の出席督促、生活指導を主とする個別的な学級が設けられた。…（中略）…しかし淡路島の漁業は瀬戸内漁業につながっている。大規模で機械化された外海の漁業に対比して不振とトモグイであるところから、魚介類を京阪神に行商する漁家が多く、漁町特有の狭い家屋生活のルーズさ、教育への無関心が併有されているこの地域では苦労の多い効果のあがりにくい点がある。正規の学校生活では長欠児として一般から一段低いものと見られがちな子も、家庭においては生計の担い手であり、漁業維持の選手でもある。父兄たちと同舟で昔ながらの一本釣り操法、指先ははなはだ鋭敏で相当量の魚獲をする。10才～15才までの少年の一群である。…（中略）…昼間の授業の際『船が出るから』早く帰ったり、子守している子を理由に下校したり、子どもの用便だといって帰って登校しない者も多かった。…（中略）…昭和29年12月８日、町議会は満場一致で夜間学級設置とその予算を認めた」とし、これによって「特別学級」から「夜間学級」に移行したと述べている。

開設日・閉鎖日については、《1979-1-248》や《2010-2-2》が1950年（月日の記載なし）から1957年３月（日の記載なし）までと記載している。ただし、《1960-2-49》は「昭和25年から10年間283名の卒業生をこの学級として世に送り出した」としており、1960年も継続中であることを示している。また、「うち漁業が大半、魚類の行商、工員、女中等が多い」とも述べている。

【沼島村立沼島中学校夜間授業】

三原郡の沼島村立沼島中学校で夜間授業が行われたという記録はあるが、その名称は記載されていない[64]。《1978-1-24》は1950年11月３日に「この頃より夜間授業を開始す」と記し、《1978-1-28》は1951年10月17日に「長欠生徒のために夜間特別授業を行う」と記している。当時の原田有夫校長は、「一人でも多く救い１日でもよく出席させるためには夜間授業を実施するより外に道はないと確信し、昭和25年11月週２回乃至３回実施して今日まで継続しています」と述べている[65]。その他には、開設を1951年11月（日付の記載なし）とする史料もある[66]。閉鎖日は、《1979-1-248》《2009-1-2》等が、1957年３月（日付けの記載なし）としている。沼島中学校は設立以来、沼島村立沼島小学校内に併設され、1955年11月１日に新校舎に移転しているため、「夜間授業」も当初は沼島小学校で行われていたものと推測される。ただし、新校舎移転後の開設場所は確認し得ていない。

在籍生徒数、卒業生数、性別、年齢、職種は確認し得ていない。

また、1955年４月29日、町村合併により、沼島中学校は三原郡南淡町立となっている。

【福良町立福良中学校】

三原郡の福良町立福良中学校の夜間学級については《1963-2-762》に記載されているが、出典として挙げられているのは由良中学校「希望学級」である。

開設日として、《1979-1-248》は1950年（月日の記載なし）と記すが、この根拠も《1963-2》である。従って、福良中学校の夜間学級は由良中学校「希望学級」の誤記であった可能性がある。

第10章　岡山県・鳥取県

岡山県と鳥取県には、各１校ずつ夜間中学校の存在を記載した史料がある。

【児島市立下津井中学校（名称不明）】

岡山県の児島市立下津井中学校には、《1954-8》《1955-1-6》に、名称は不明だが、夜間学級の存在が確認し得る。

同学級は、《2004-1-116～117》によれば、1954年（月日記載なし）に開設され、1955年に閉鎖された。

生徒の人数・属性等は確認し得ていない。

【鳥取市立西中学校（名称不明）】

鳥取市立西中学校の夜間学級は、《1976-2》に確認し得る。

名称・開設時期、及び、生徒の属性は確認し得ない。

第11章　広島県

広島県には少なくとも３校、または４校の夜間中学校があった。ただし、《1983-1-15》は「（広島）市内の中学校の３分の１にあたる５校で、水曜日と土曜日の夜３時間ずつ実用習字、洋裁、珠算などを教え」ていたと記している。

広島市内の２校（観音中学校・二葉中学校）について、《1966-1-13》は「町内会（同和地区）の要請によって、直接の発足を導いた。…（中略）…広島市の場合二校ともに同和地区を背景としている」と述べる。また《1983-1-15》も、部落差別事件を機に部落解放委員会県連が夜学校設立等を要求し、これを県当局が了承した経過を述べている[67]。

広島市内の２校の生徒の職種について、《1966-1-13》は「主な職業は製靴業である。生徒は小学校を卒業と同時に前近代的徒弟関係で弟子入りする。そして製靴業という職業は大変に『カン』や『ナレ』を必要とする職業であるから、中学校を卒業してからでは

遅すぎるので、親は自然小学校を卒業と同時に子供を弟子入りさせ」ると述べる。《1983-1-15》も、両校の開設の要因として製靴組合の陳情を掲げている。

ただし《1983-1-15・17・20》は、「全市を一区とした二部学級の設置」、「学区は設けない」、「名称は観音中、二葉中の二部学級であるが、実質的には広島市の二部学級」と記す。《1990-2-768》は、同和地区出身の生徒数が、1955年９月時点で観音中学校二部の生徒88名のうち33名、二葉中学校二部の生徒55名のうち22名と記す。生徒が同和地区に限らず、全市から幅広く通学していたことが見て取れる。

【広島市立観音中学校二部学級】

広島市立観音中学校「二部学級」[68] の開設日は、1953年４月１日、及び、同年５月１日とする史料がある[69]。《1954-9-40》は、５月１日を授業開始日とし、「開設当日本校では四三名の就学者を得たが、以後漸次増加して現在では八八名に及」ぶと述べる。ただし《1967-2-6》は、1954年度に「夜間部設置」と記している。

在籍者数は各年度88～99人[70]、卒業者数は16～28人であった（表24・25）。

生徒の性別に、顕著な偏差は見られない。

年齢は卒業者についてのみ確認し得、1953～54年度は学齢超過者が特に多く、1955年度には学齢者が約６割と逆転している（表26）。『中国新聞』（1953年７月７日）は「二十歳をいくらか過ぎたような女生徒もいる。…（中略）…大人のような身体をした少年と、十歳くらいの小さな男の子が一緒に並んでいる」と記す。《1983-1-6》には1954年に入学した生徒の手記として、原爆で父を失ったこと、また入学して「始めは年上の人が多いので、ついていけるか心配」だったことが記されている。

生徒の職種は統計的には把握し得ないが、『中国新聞』（1953年７月７日）は「職種別は女子が菓子製造業、食品加工業、男子が大工・左官の塗料業に従事（し）…（中略）…なかには一本立ちをするための美容師の資格取得のために…という女生徒もいる」と記している。製靴業従事者はあまり多くなく、開設の経過とは別に生徒は多様な職種に従事していたようである。

【広島市立二葉中学校二部学級】

広島市立二葉中学校「二部学級」・「第二部学級」[71] の開設日は、1953年５月１日[72] とされ、《1980-1-4》はこの日を「開設式・入学式」と記している[73]。《1954-10-29～30》は、「今年（筆者注：1953年）の五月には昼間働く生徒のために夜間第二部も開設され、広く広島市東部の生徒を収容している」と記す。

生徒数について、《1953-3-2》は「開設までに20余名の希望者を得、その後、漸次増加して現在50余名の在籍者に達し得た」と記す。在籍者数は各年度52～81人[74]、卒業者は９～22人でいずれも増加している。

生徒の性別は、在籍者・卒業者とも男性が約３分の２を占める。

年齢は、1953年度の在籍者では学齢が約４分の３を占めるが、卒業者では各年度とも学齢超過者が８割前後と多い。『中国新聞』（1953年７月７日）は「平均年齢は十六歳」と記す。

生徒の職種は1953年度で見れば、男性は工員・配達外交、女性は詳細は不明だが見習等が多い（表27）。『中国新聞』（1953年７月７日）は、「職種は男子は大工、左官、家事の手伝い、女子は食品加工業と多種多様」と記している。

【豊浜村立豊浜中学校夜間学級】

豊田郡の豊浜村立豊浜中学校にも、「夜間学級」があった[75]。

開設日は、1951年１月18日、及び、1952年５月１日とする史料が多く、それ以外にも1951年４月28日、同年６月１日、７月等、多様な記載がある[76]。

《1954-2-103・124》は、「生徒の87％は一本釣の漁師の子弟で此の時代漁法のこつを仕込まねばならないという考え」で親が昼間通学させず、また保護者が愛媛・山口・大分に出漁して「幼児を残しているため、その弟妹の世話に当たらねばならぬ者」もいると記している。『中国新聞』（1955年９月９日）[77] も「家族連れで出漁するものが多く、中学生に至っては親とともにそのほとんどが瀬戸内海の西半海面および五島連（ママ）島、対馬方面まで出漁し旧正月と

表24　在籍者（広島県）

年度		1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
観音	男			29	47	45	《1983-1-42》
	女			59	52	45	
	計			88	99	90	
二葉	男			36	43	53	《1983-1-42》
	女			16	18	28	
	計			52	61	81	
	計			－	64	64	《1966-1-24》
豊浜	計	90	97	70	82	100以上	《1979-2-77》

表25　卒業者（広島県・福岡県）

年度		1951	1952	1953	1954	1955	主な史料出所
観音	男			6	18	14	《1970-2-付10》
	女			10	10	12	
	計			16	28	26	
	計			16	27	27	《1964-2》
二葉	男			7	12	16	《1983-1-42》
	女			2	6	6	
	計			9	18	22	《1964-2》
豊浜	計			66	1	3	《1964-2》
東光	男	2	2	16	7	9	《1957-4》
	女	3	4	8	8	5	
	計	5	6	24	15	14	

表26　年齢（広島県）

			学齢者	超過者	計	主な史料出所
観音	卒業者	1953	3	13	16	《1983-1-21》
		1954	7	21	28	
		1955	16	10	26	
二葉	卒業者	1953	2	7	9	《1983-1-21》
		1954	3	15	18	
		1955	13	19	22	（計と不一致）
年齢			12～15	16～19	計	主な史料出所
二葉	在籍者	1953	40	12	52	《1953-3-6》

表27　職種（広島県）

			主な職種	主な史料出所
二葉	1953年度	男	工員(4)、配達外交(3)、見習(1)、家事労働(1)、雑役(1)	《1953-3-17》
		女	見習(2)、配達外交(1)、家事労働(1)、雑役(1)	

旧盆しか帰村しない慣例で、義務教育などはてんで問題にされていないので、同村中学校では近海で漁業をしているのは週五回漁業会の階上で午後七時から同九時半まで特別授業を行って」いると記している。《1965-1》も「漁業家族の小（ママ）供で昼出漁する」と述べる。また《1966-1-14》には「豊浜村の漁業は、家族ぐるみの漁業である。多くは５～７人乗り位の小さな船で鹿児島沖、五島列島、時としては東シナ海までも行くのである。それも１ケ月から２ケ月、時には３．４ケ月も村に帰らない。子供の役は『かじこ』という職種であって、それは網を流しながら常に潮に流されないように、或は潮にそって流してゆくようにと船を動かしている役である。その役が小学校を終えた位の子供が使われる。それには、漁を子供の時からやらねば、潮の見方、魚の集まり方等、非常にカンを必要とする判断と技術を身につけなければならないという親の考え方と、そうして、子供を労働力として船に乗せねばならないという貧しさがある」と述べている。《1967-1-69》も、「近海漁業に中学校就学年齢の子弟を従事させ、技術を修得させるために、正規に就学させることを欲しない家庭が多い。つまりこれらの家庭では、職業技術の修得が中学校就学より優先的地位を占めている。もっともそれもやむをえない面もある。近海漁業では、中学校就学年齢時から実地について十分に技術を仕込まないと、一人前の漁師として生業の途を立ててゆくことができないからである」と記す[78]。

そして《1971-2-24～25》は、「昭和二十八年、夜間中学が設立された当時は漁業組合の二階で二～三〇名の生徒が授業を受けていました。Ａ地区では七七〇世帯のうち四七〇世帯が漁業家庭であり、この漁業家庭の八割が他県他海へ出漁する状況です。…（中略）…夜間中学設立当時は学寮もなく親とともに海上生活をする状況で未就学児が多くいました」と述べる。《1979-2-76～77》も、漁業組合が組合事務所の二階を教室として提供し、そこに豊浜中学の教師が出張授業を行い、1951年１月18日の開講日の入学生徒は83名だったと述べている。

在籍者数は、各年度概ね70～100名以上である。卒業者は《1964-2》によれば、1953年度は66人と多かったが、その後は１～３人に激減している。

生徒の性別・年齢は確認し得ていない。

生徒の職種について《1954-2-27～28》は「近海で漁業し、昼間は出席できない」と述べる。

【広島県のその他の中学校】

なおこれ以外に広島県内では、《1989-1-12》《1990-1》等に「因島中」の存在が記されている。ただし開設年次が1955年以前か否かも含め、詳細は不明である。

なお因島市が合併により成立したのは1953年５月１日だが、因島中学校という校名の学校は存在せず、誤記の可能性がある[79]。

第12章　高知県

《1976-1》は「高知県では一九五〇年頃から夜間学級が一〇校前後開かれていたとの記録があり、現在、確認作業を行っています」と記す。《1989-1-12》《1990-1》等も、高知県に存在した夜間中学校として14校、記載している。これらについては、公立中学校との関係も含め、未解明の点が多い。本稿では、《1990-1》に「学校名」として各中学校名が記されているので、さしあたりそれに従う。

【赤岡町立赤岡中学校（名称不明）】

香美郡の赤岡町立赤岡中学校に夜間学級が存在したようだが、名称・開設日、生徒の属性を示す史料は確認し得ていない。

《1989-1-12》は、同学級が1954年に閉鎖されたと記している。

【大方町立大方中学校（名称不明）】

幡多郡の大方町立大方中学校の夜間学級も、名称、生徒の属性は確認し得ない。

《1989-1-12》は、開設場所を「満行寺」、開設年を1953年（月日記載なし）と記す。

【須崎町立須崎中学校（名称不明）】

高岡郡の須崎町立須崎中学校の夜間学級も、名称・生徒の属性は確認し得ない。

開設場所は「円教寺」で、開設時期は1953年（月日記載なし）、及び、1949年３月とする史料がある[80]。『朝日新聞（高知版）』（1951年１月24日）は、「家庭が貧しいとか、父兄が家業の手伝いを強いるため、行きたくても学校へ行けない子供達のために高岡郡須崎中学校ではPTAと相談し、一昨年三月から、同町円教寺本堂で夜学を開いている…（中略）…。三年生の二名は夜学だけで見事卒業の資格を得た。本年も数名の卒業者が出る見込み」と記す。

【戸波村立戸波中学校夜間部】

高岡郡の戸波村立戸波中学校では、《1951-2》によれば「清福寺」において「夜間部」または「夜学」が開設された。

《1989-1-12》は、開設時期を1950年（月日記載なし）と記し、「青年団がアルバイトとして」と述べる。

また《1951-2》は、1948年に戸波村の被差別部落の青年団が自主的に夜学設立の運動を行い、年次の記載はないが高岡高等学校戸波分校の教諭に講師を依頼し、清福寺の一室を借りて夜学校を開始した経過を記している。常時24～25名の青年が出席し、「小学校四年生から上は十八才位までの年齢差はあったが、ほとんどが小学校へもろくに行っていないし、上級学校へ行っているものもまた充分な学力がついていなかったので、小学校低学年程度の同一教材で学んだ」という。『高知新聞』（1951年３月15日）は、「戸波青年団の夜学講座は昨年十月開講当時受講者わずか十名であつたが、最近は百名を越す盛況ぶり、男女青年はもとよりおじさん、おばさんたちもまじり月、水、金曜の夜間三時間余を…（中略）…勉強にはげんでいる」と記している。

なお《1989-1-12》によれば、同校は1955年（月日記載なし）に閉鎖されたという。戸波村は1954年に合併で高岡町となった。

生徒の性別・職種等は不明である。

なお『高知新聞』（1951年５月１日）は、戸波中学校が1951年４月22日に不就学生徒ゼロを達成し、そこに至る取り組みの一つとして「特別学級」を作ったと記す。ただしこれと前述の夜学との関係は不明である。

【高知県のその他の中学校】

《1989-1-12》《1990-1》によれば、それ以外にも高知県に多数の夜間中学校が存在していた。いずれも夜間学級の名称、生徒の人数・属性は確認し得ていない。

①高岡郡の宇佐町立宇佐中学校。開設年は1953年（月日記載なし）とされる。なお『高知新聞』（1948年12月20日）には、宇佐中学校の不就学者の大半が貧しい漁家の子弟で「四月ごろから半年以上も遠洋漁業に働くものもある」と記している。

②安芸郡の安田町立安田中学校。開設日は不明だが、1951年（月日記載なし）に閉鎖されたという。

③安芸郡の安芸町立安芸中学校。開設年は1952年（月日記載なし）とされる。ただし、『高知新聞』（1951年６月15日）は「安芸町では西浜地区の義務教育未修了者（十四歳～二十歳まで）約三十名を対象にさる五月から双葉保育園に夜学を開設した、…（中略）…なお町では今後は西浜公民館の事業として経費も公民館費の一部を充当し貧困者には学用品を貸与するはず」と記す。

一方、『高知新聞』（1952年６月４日）には安芸中学校において不就学対策として「家庭の事情で、どうしても学校に来られぬ生徒たちのためには夜間一ケ所に集めて授業する案も出たがこれには相当な予算が伴うので早急実現は困難とみられている」との記載がある。安芸町の夜学は安芸中学校のそれではなく、公民館事業と位置づけられていたと思われる[81]。

なお『高知新聞』（1953年６月11日）は、安芸中学の不就学者について「地引網の引き子をするもの、遠く日本海へ一本つりに行った漁師の子供も五人、ひどいのになると町内の特飲店で働いている女生徒が三人…（中略）…、木炭や木材の積出しなどの重労働に加っているものが五、六名あった」と記す。また『高知新聞』（1955年６月11日・７月７日）には、同地では「馬追い」に生徒が従事し、これが不就学の一因になっているとの記載もある。安芸町は1954年８月に安芸市となっている。

《1989-1-12》《1990-1》は、開設年が1955年以前か否かも含めて未確認の夜間中学校として、下記の各校も掲げている。

④「南海中（子供会として）」。現在の高知市立南海中学校は、1947年に高知市立長浜中学校として開設され、1951年４月、南海中学校と改称された。

⑤「汐江中学校」。高知市立潮江中学校と思われる。

⑥安芸郡の室戸町立室戸中学校。

⑦安芸郡の吉良川町立吉良川中学校。

⑧幡多郡の宿毛町立宿毛中学校。

さらに《1989-1-12》は「奈宇利中」と「朝倉中（識字学級的）」の存在にも言及している[82]。

⑨このうち、「奈宇利中」は「奈半利」の誤記と思われる。《1972-2-773》に、安芸郡奈半利町立奈半利中学の名称がある。

『高知新聞』（1950年12月23日）は、「安芸郡奈半利町中学（が不就学児童対策として：筆者注）…（中略）…特別学級を編制することになった」と記す。ただし同記事は「長期欠席の理由は通学服や学用品の不足より学業が遅れてはずかしいことが特別学級編成ですべては解消される」と述べ、これを夜学とは記していない。

また『高知新聞』（1951年２月16日）は「安芸郡奈半利町東浜青年団は約三十名に上る同町中学校の長期欠席者を自分たちの力でなんとか登校させる道はないかと、かねて学校側と話合つていたが、これらの児童の大部分が家庭の生活難から漁業その他家事の手伝いに使われていることを知り、…（中略）…夜学の開設を計画」し、「会場は部落のお寺、倉庫などをあてるはずで借受交渉その他の準備を進めている。同校の不就学児童は昨年十月、四十六名に達し学校側では特別学級を編成…（中略）…したものの通学者はわずかに十八名、しかもその後脱落者も出るといつた有様で、その措置に悩んでいた」と記している。

⑩「朝倉中（識字学級的）」は高知市立朝倉中学校と思われるが、具体的な実態は確認し得ていない[83]。

さらに《1989-1-12》は、開設年が1955年以前か否かも含めて不明だが、福岡県に存在した夜間中学校として、「長岡（蔦ケ池）」を掲げている。《1972-2-774》には高知県長岡郡に蔦ケ池中学校の名称が確認し得、福岡県ではなく、高知県の誤記と推定し得る。なお1950年に南国市の発足に伴い、長岡村は廃止された。『高知新聞』（1954年４月10日）は、長岡村の蔦ケ池中学校で弟妹の子守・家事等に従事していた不就学者に対して「特別授業」を実施したと記す。ただし、これが夜学か否かは確認し得ない。

第13章　福岡県

最後に、福岡県の夜間中学校について見ていこう。

【福岡市立東光中学校促進学級】

福岡市立東光中学校「促進学級」[84]の開設日は、1951年４月１日、同年６月１日、同年６月８日等[85]とする史料がある。

《1966-1-17》は、同学級が「戦後の混乱によって形成されたスラム街の不就学者を対象として」発足したと述べる。また《1979-2-83》は、「校区内に中小企業が多く、家屋密集し、生活困窮のため長欠生徒が多かった」との校長談を記している。

在籍者数は《1965-1》によれば1951年度が６人、《1954-2-16》によれば1953年度が62人と急増している。卒業者も1951年度の５人から、1953年度には24人と増加しているが、その後は14～15人にとどまっている。

性別は卒業者でみる限り、傾向的な偏差はない。年齢は不明だが、《1975-1-1086》は「年令の巾は極めて広かった」と記す。

生徒の職種を示す史料は確認し得ていない。

【山田市立南中学校促進学級】

山田市立南中学校にも「促進学級」があり、開設日は1954年４月10日とされる[86]。

《1975-1-1086》は同学級が、「中小炭鉱の閉廃山で筑豊地区や山田市でも不就労児が多く」、「15名程度で発足」したと記す。

生徒の人数・属性は不明である。

【大牟田市立松原中学校促進学級】

大牟田市立松原中学校にも「促進学級」があり、開設は1952年９月11日とされる[87]。

同学級は《1975-1-1088》によれば、1955年３月31日、「生徒が皆無になり、特殊学級に切り替え」られ、閉鎖されたという。なお《1976-1》は閉鎖日を1957年３月31日と記す。

《1954-2-15》によれば、1953年度の在籍者数は36人である。《1975-1-1088》は、開校中の卒業者総数は12人と記す。

生徒の属性は不明だが、《1954-3-5》に「あかぎれや、ひびだらけの手で鍋を洗い、或は肩にくい込む帯の痛さをこらえて背中の子をあやしつつ、人の目をしのんで、ガラや朽木を拾う」との記述がある。

【大牟田市立歴木中学校促進学級】

大牟田市立歴木中学校にも「促進学級」があり、開設日は1953年５月１日、及び、同年５月８日とする史料がある[88]。

《1954-2-16》によれば、1953年度の在籍者数は22人である。また《1975-1-1088》は「20歳の人」もいたと記す。

生徒の性別・職種等は確認し得ていない。

【宇美町立宇美中学校促進学級】

糟屋郡宇美町立宇美中学校にも「促進学級」が開設された[89]。

開設日は、1952年２月７日、及び、２月８日とする史料がある[90]。

《1960-4-6》は、同校が「福岡市近郊の中小炭坑地帯に位置」し、「生徒の家庭の職業は約６割が炭坑関係の従業員で貧困者が多く為めに長欠、不就学生徒数は…（中略）…昭和27年（当時全校生徒数約１千人）前後は百人を越える状況にあった。これ等の家庭は殆ど無職（生活扶助）、日雇人夫、洗い炭、豆炭工場人夫等」であったと述べる。

在籍者数は、《1965-1》によれば1952年度が127人、《1954-2-15》では1953年度が34人だ。生徒の属性は確認し得ていない。

【小倉市立企救中学校夜間学級】

小倉市立企救中学校には、後の時期の史料での名称だが、「夜間学級」[91]が存在した。

開設日は、1953年４月（日付記載なし）、及び、同年５月１日とする史料がある[92]。

《1975-1-1086》等によれば、「特殊学級を開設したら、未就学生徒が多く、昼働く子供のため、担任が自発的に開設」したが、1954年１月10日、「担任が昼間特殊学級、夜は夜間学級をもち過労で倒れたため」、閉鎖されたという[93]。

《1954-2-16》は1953年度の在籍者数を30人、《1975-1-1086》は同校は卒業者がいなかったと記している。

また《1965-1》は、「文部省の調べでは開設されたとあるが、（同校からの：筆者注）回答には開設されず」と述べる。

【福岡県のその他の中学校】

《1989-1-12》《1990-1》は、開設年が1955年以前か否かも含めて不明だが、福岡県に存在した夜間中学校として、「擽木」を掲げている。所在地・生徒の属性等は、確認し得ていない。

終章　1947～1955年の夜間中学校と生徒の特徴

以上、1947～1955年頃の夜間中学校とその生徒の基本的な特徴を、各学校レベルに降りて見てきた。

簡単に総括しよう。

第１節　学校数

本稿では、14都府県に位置する126の夜間中学校に言及した。ここには各教委が認可した学校もあれば、自主的なそれも含む。開設場所も公立中学校だけでなく、小学校や公民館、寺院、保育所、漁協の二階等、多様である。

夜間中学校の学校数には、不確定な要素が極めて多い。

まず第１に、ごく近年の調査によって、存在が確認された学校が少なくない。江口怜《2015-2》の和歌山調査、横関理恵《2017-1》の奈良調査、本稿の兵庫調査等で、いくつかの新たな夜間中学校の存在が確認された。またほとんどの都道府県は未調査であり、今後の調査研究により、学校数が増加する可能性は大きい。

第２に、既存の史料での誤記の可能性も含め、実態が極めて曖昧な学校も少なくない。学校名や所在県（広島県因島、福岡県擽木、高知県鳶ケ池・奈半利）、他校との混同（兵庫県福良）、夜間学級開設の有無（兵庫県上野・鷹取、福岡県企救等）等、最も基本的な事項についても、さらなる調査が必要なケースがある。

第３に、開設時期が1955年度以前か否か、不明確な学校もある。特に奈良県・高知県では、そうしたケースが多い。既存史料によれば1955年以降は新たな夜間中学校の開設が極めて少ないことをふまえ、これらの学校についても本稿で言及したが、今後の調査研究による検証が待たれる。

第４に、本稿で言及した126校のうち少なくとも15校は1954年までに閉鎖された。「序」で述べた如く、《1955-2》は1955年度の夜間学級設置校数を120校と記している。この記載が正しいとすれば、本稿が把握し切れなかった夜間中学校が少なくとも９校以上は存在していたことになる。

本稿は、今後の調査研究の出発点を示したにすぎない。

第２節　名称

名称は、極めて多様であった。複数の呼称をもつ夜間学級も少なくない。また1955年度以降の史料でしか名称が確認できないケースも多く、この点でもさらなる検証が必要だ。

ただし、総じて以下の特徴が見てとれる。

まず第１に、教委が認可し、管轄下に複数の夜間中学校を開設した場合、「夜間」の呼称を避け、しかもどの公立中学校に属するのかを明確にした統一的名称が付されている。すなわち東京都では各公立中学校の「第二部」、横浜市・名古屋市・京都市・広島市では「二部学級」、大阪府岸和田市では「補導学級」等である。ただし通称としては「夜間学級」「夜間部」等の記載も、1955年度以前の史料に確認し得る。

第２に、教委が認可したが、当該市町村に一つの夜間中学校しかなく、または各校の成立過程が多様だった場合、各地・各学校毎に名称は多様であった。ただしやはり「夜間」の呼称は回避されたケースが多い。「特殊学級」（兵庫県駒ケ丘・玉津・伊丹南）、「二部学級」（大阪府大浜）、「補習教室」（大阪府豊中第一）、「促進学級」（福岡県内の多数の学校）等である。とはいえ認可の有無は不明だが、一部には「夜間学級」（兵庫県神崎）の呼称も見られる。町議会での設置承認を機に「特別学級」から「夜間学級」に移行したと記すケース（兵庫県岩屋）もある。

第３に、無認可と思われる夜間中学、及び、1955年度以降の史料

でのみ名称を確認し得るそれでは、「夜間」を付した名称が多い。「夜間学級」「夜間学習」「夜間特殊学級」「夜間特別授業」「夜間部」「特別夜間学級」等である。もちろん「特設学級」「特別課外指導」「補習学級」「補習授業」等、「夜間」の名称を付さない学校名も見られる。

第４に、本校以外の場所に設置された場合、「分校」と称したケースもある。「彌栄分校」（奈良県大宇陀）、「西野分校（西野分教場）」（兵庫県丸山）、「芦原分校夜間特別学級」（兵庫県大社）等である。また地域名を付した「東之阪地区養護学級」（奈良県若草）、「野田夜間学級・蘭之沢夜間学級」（和歌山県緑が丘）、「薗地区夜間学級・島地区夜間学級」（和歌山県御坊）、「坂本地区夜間学級」（和歌山県日置）等も見られる。

そして第５に、現場で生まれた愛称がある。「舵っ子夜学」（横浜市）、「夕間学級」（大阪府生野第二・玉津）、「たんぽぽ教室」（兵庫県太田）、「希望学級」（兵庫県由良）等である。

こうした名称の多彩さは、夜間中学校の成立過程の多様性を物語る。

第３節　開設の時期と経過

各学校の開設と閉鎖の年月日もまた、史料によって多様である。単純な誤記の可能性もあるが、自主的な教室の開始、恒常的な開設、教委の認可、開設入学式、授業開始等、様々な期日が一定の根拠をもって「開設日」と記載されたからでもある。

開設の時期と経過は、所在地の違いに基づき、概ね７つのタイプがある（表28・29）。

まず第１は、大阪府と兵庫県だ。ここでは、1947年と最も早い時期に府県庁所在地（大阪市・神戸市）に夜間中学校が開設され、その後、1954年まで多数の市町村で認可・無認可双方の新設が相次いだ。福岡県もこれに準じ、1951年に福岡市で夜間中学校が設立され、その後、多くの市町で新設された。なお大阪府と福岡県では市部での開設が多いが、兵庫県では市部・郡部を問わず、多様な地域で多くの学校が開設された。

第２は、神奈川県・京都府・愛知県・広島県である。ここでは、1950年代になってから、府県庁所在地の教委が複数の公立夜間中学校を一挙に開設した。横浜市は1950年、京都市は主に1950～1951年、名古屋市は1952年、広島市は1953年である。県庁所在地ではないが、1953年の神奈川県川崎市も、これに準じる。

第３は、東京都である。ここでは、1951年以降、特別区に公立夜間中学校の開設が相次いだ。またこれに準じる形で、八王子市と立川市でも公立夜間中学が新設された。都内で無認可の学校は、足立五のみである。

第４は、和歌山県・高知県・奈良県である。和歌山県は1948年以降、高知県は1949年以降、奈良県は1950年以降、それぞれ郡部を中心として夜間中学校が自主的に開設されていった。公立中学校や行政の関与の仕方は多様で、不明な点も多い。

そして第５として、独特の産業構造をもつ地域に成立した夜間中学校もある。漁業を背景とした「舵っ子夜学」（1948年・神奈川県横浜市）、豊浜（1951年・広島県豊浜村）、及び、組紐生産地の崇広（1950年・三重県上野市）である。これらの学校は、県内で唯一、または県庁所在地に先立って開設された。

表28　開設年次一覧（学校名は略称）

	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
東京					足立四	八王子 立川三	双葉 糀谷 曳舟	足立五 新星	
神奈川		舵っ子		豊岡 保土谷 戸塚 大網 平楽 蒔田 港・西浜			川中島 塚越		
愛知						天神山 東港			
三重				崇広					
京都				皆山 朱雀 藤森 洛東 西院 烏丸 近衛 山科 嘉楽 九条 北野 修学院	陶化 高野		弥栄		
大阪	生野二 東陽	布施四	玉津	大浜	豊中一	岸城		光陽 久米田 春木	
和歌山		富田	南部	野上		城南 緑が丘 本宮村 日置 御坊 西向	切目 安原		
奈良				若草 箸尾	東市	鴨公村 大宇陀		安堵	三郷 河合
兵庫	駒ケ林		山陽 丸山 大橋 布引	伊丹南 灘 沼島 岩屋 小田南 宝塚一 須佐野 由良	太田 城内 大庄東 大社 玉津 昭和	住吉 明倫 洲浜 鷹取 東光 神崎		花園	
岡山								下津井	
広島					豊浜		観音 二葉		
高知			須崎	戸波	安芸		宇佐 大方		
福岡					東光	松原 宇美	歴木 企救	山田南	

注：複数の記載がある場合、最も早期の開設年を採用。開設年次不明の学校は不掲載。

1955年度以前に閉鎖された学校も、少なくとも33校みられる（表30・31）。

まず第１に、大阪市内で早期に開設された学校は、校区外通学や学齢超過者の増加を理由として教委の理解が得られず、最も早期に閉鎖に追い込まれた。同じく早期に夜間中学校が開設された神戸市では、教委によって認可され、その後、多数の夜間中学校が開設されていったが、大阪市教委の対応は対称的であった。

表29　所在地一覧（学校名は略称）

	特別区・県庁在地	その他の市部	郡部
東京	足立四・双葉 曳舟・糀谷・ 足立五・新星	八王子五 立川三	
神奈川	舵っ子（浦島丘） 豊岡・平楽 蒔田・港・浜 保土谷・西 大網・戸塚	川中島 塚越	
愛知	天神山・東港		
三重		崇広	
京都	皆山・嘉楽 弥栄・藤森 洛東・九条 烏丸・北野 近衛・朱雀 陶化・高野 修学院・西院 山科		
大阪	生野二・東陽 玉津	大浜・豊中一 布施四・岸城 光陽・春木 久米田	
奈良	若草・東市 都南		鴨公村・安堵・三郷 平群・箸尾・河合 大宇陀・掖上・式下
和歌山		城南・緑ケ丘	御坊・切目・南部 日置・富田・本宮村 西向・野上・安原
兵庫	駒ヶ林・大橋 丸山・須佐野 太田・玉津 鷹取・花園 上野・布引 住吉	小田南・城内 昭和・明倫 大社・伊丹南 灘・山陽 東光・洲浜 大庄東	宝塚一・神崎・由良 岩屋・沼島・福良
岡山		下津井	
鳥取	鳥取西		
広島	観音・二葉		豊浜
高知	海南・潮江 朝倉		赤岡・須崎・戸波 宇佐・安芸・室戸 吉良川・奈半利・大方 宿毛・鳶ケ池・安田
福岡	東光	山田南・松原 歴木・企救	宇美

表30　閉鎖の時期一覧（学校名は略称）

	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	不明
神奈川							浜 保土谷	
京都						西院		
大阪	東陽	生野二		玉津			光陽	
奈良				若草			鴨公村	東市
和歌山						日置 安原	西向・城南 緑ケ丘 本宮村 野上・切目 御坊	
兵庫			宝塚一	大橋	太田	須佐野 鷹取	大庄東 洲浜・住吉 東光	山陽
岡山							下津井	
高知			安田			赤岡	戸波	
福岡						企救	松原	

表31　閉鎖の理由一覧（学校名は略称。不明は略）

	生徒少	校区外通学 年齢超過 教委の無理解	長欠解消	その他
神奈川	浜 保土谷			
京都	西院			
大阪		生野二・玉津		
奈良				
和歌山			城南・野上 緑が丘	野上（病気）
兵庫	大橋 須佐野 太田			住吉（無認可） 洲浜（全員卒業） 宝塚一（台風）
岡山				
高知				
福岡	松原			企救（過労）

第２に、教委が多数の夜間中学校を一斉に設置した横浜市と京都市では、1954年以降、生徒数の減少を理由に３校が閉鎖された。

第３に、大阪市を除く大阪府、兵庫県、福岡県でも、計12校が閉鎖された。理由は不明の場合が多いが、神戸市内・福岡県内のそれは生徒数の減少を理由としている。

第４に、和歌山県・高知県・奈良県では、特に1954年以降、多数の夜間中学校が閉鎖された。理由は不明だが、和歌山県では「長欠の解消」が見られ、また多くが閉鎖後、「子供会」「同和対策」等の形で継続されていった。

第４節　地域特性と生徒の就労状況

夜間中学校の所在地が、経済的に貧困で不就学率が高い地域であったことはいうまでもない。ただし、その背景は多様である。また特に都市部の認可校は、広域的通学の便宜も考慮して開設された。しかも、夜間中学校の開設地域は多くの場合、他地域からの低所得層の流入地であった。その意味で、夜間中学校の開設は、所在地の校区の特殊な事情というより、むしろ全国的・広域的な貧困や不就学の蔓延によってもたらされていた。

とはいえ、各学校には、やはり一定の地域的背景が見られ、それは生徒の就労や生活と深く関連していた。

まず第１は、中小零細企業形態の製造業、及び、商業の集積地である。東京都の足立四・双葉・曳舟、名古屋市の天神山・東港、大阪市の生野二・玉津、神戸市の布引・花園・駒ケ林・太田、尼崎市の小田南・城内・大庄東、西宮市の大社、姫路市の東光、そして広島市の観音・二葉等が該当する。ここでは、製造工として働く生徒が最も多く、店員・都市雑業層が次ぐ。女生徒には、両親が就労している間の弟妹の子守・家事・留守番等も多い。

第２は、衣料製造業の集積地だ。ここでは女性の生徒が多く、また男性も含めて衣料製造業従事者が多い。これに該当するのは、東京都の八王子五、三重県の崇広、京都市の嘉楽等である。

第３は、漁村を背景とした地域である。ここには２つのタイプがある。

一つは、漁村に特有の不就学率の高さを背景として夜間中学校が設立されたが、1955年以前に漁業が衰退し、工業化・都市化が進んだ地域だ。横浜市の浦島丘（舵っ子夜学）がその典型で、神戸市の駒ケ林にもその要素が見られる。生徒の多くは、製造工や店員等と

して就労していた。

もう一つは、漁業が主な生業であり続けた地域だ。兵庫県の由良・岩屋・灘、広島県の豊島、高知県の宇佐・安芸・奈半利等である。ただし漁業と並び、高知県では農業や林業、兵庫県の灘では塩田作業、及び、神戸港から輸出されるマッチの製造も生徒の主な就業先となっていた。

第４は、福岡県の炭鉱地帯である。中小規模の炭鉱が位置した山田南・宇美が該当する。生徒自身は炭鉱で働くよりむしろ、両親の失業・貧困の下、ガラ拾いや子守、家事に従事していたようである。

第５は、戦争・敗戦の被害に関わる諸地域である。立川三（東京都立川市）では、米軍基地の存在が独特の地域的荒廃を生み、生徒に販売・サービス職従事者が多かった。また、就学意欲の特別な低さが指摘されている。新星（東京都世田谷区）では、地元に満州引揚者の集住地があり、ここでも生徒に販売・サービス職が多い。福岡市の東光も、「戦後の混乱によって形成されたスラム街の不就学者」を対象として開設された。なお広島市の観音・二葉では、生徒の貧困の背景として原爆の被害が言及されている。

第６に、それ以外にも、多様な地域産業構造が見られる。大阪府岸城では岸和田港建設のため多数の労働者が流入し、不就学生徒が生じたと述べる。京都市の弥栄は「祇園の御茶屋から登校する女生徒」への言及がある。

そして第７に、三重県・京都府・奈良県・和歌山県・兵庫県・広島県・高知県等、西日本の諸地域では、同和地区への言及が特に多い。またここでは、ゴム・皮革製品の製造業に従事する生徒が多い。ここでは他地域からの新たな流入者が多かったとは考えにくく、差別に根差す貧困をふまえ、地元住民自身の主体的な取り組みの中で夜間中学校が成立していった。

第５節　在学者・卒業者の人数

さて、各校の在学者・卒業者数も、史料によって多様な記載がある。継時的に推移を把握しうる学校もあれば、単年度しか確認し得ない学校もあり、単純な比較は難しい。こうした史料的限界をふまえつつ、あえて比較すると、次の諸特徴が見てとれる。

まず第１に東京都には、大規模校が多い（表32～34）。特に足立四は、単年度の在籍者が300人以上、同じく卒業者が60人以上、1955年度以前の卒業者累計が200人以上と極めて大規模である。それ以外にも東京都では、単年度の在籍者が60人以上、卒業者が30人以上の学校が多数見られる。なお東京都で在籍者数が少ないのは、唯一の無認可の足立五、及び、米軍基地の町で生徒の就学意欲の低さに特別の言及があった立川三のみである。

第２に、教委が各区に一斉に多数の夜間中学校を設置した神奈川県・京都府では、各校の在籍者数は60人未満、卒業者数も30人未満にとどまることが多い。特に神奈川県では在籍者20人未満の小規模校が半数を占める。ただし、ここでは学校間で在籍者数に偏りが大きく、特に京都市では単年度の在籍者が80人以上、卒業者が40人以上、1955年度以前の卒業者累計が100人以上の大規模校も見られた。

第３に、愛知県（名古屋市）・三重県・大阪府・福岡県（福岡市）・広島県（広島市）等の都市部では、在籍者数が東京都、及び、神奈川県・京都府の中間に位置している。中でも広島市はやや大規模校が多く、大阪府は小規模校が多い。卒業生の累計も、広島市・名

表32　在籍者数一覧（学校名は略称）

	300人～	100人～	80人～	60人～	40人～	20人～	20人未満
東京	足立四	双葉 糀谷 曳舟		八王子 新星		立川三 足立五	
神奈川					浦島丘 西 蒔田	保土谷 川中島 塚越	豊岡 平楽 港・浜 大網 戸塚
愛知				天神山	東港		
三重				崇広			
京都			嘉楽 藤森	皆山 北野	洛東 高野 烏丸 朱雀 九条 近衛	修学院 弥栄 西院 山科 陶化	
大阪				豊中一 大浜	生野二 玉津 岸城 布施四	春木	
奈良					若草	鴨公村 安原	東市 箸尾
和歌山		御坊			城南	西向	緑が丘 野上 切目 日置 本宮村
兵庫		丸山 住吉 玉津 大社 大橋	駒ケ林	布引 大庄東 小田南	城内 灘 山陽	須佐野 由良 太田 東光 伊丹南	昭和 明倫 洲浜
広島		豊浜	観音 二葉				
高知		戸波				安芸	
福岡		宇美		東光		松原 企救 歴木	

注：判明している中で最も人数が多い年度を採用。

表33　各年度の卒業者数一覧（学校名は略称）

	60人～	40人～	30人～	20人～	10人～	10人未満	なし
東京	足立四 曳舟	糀谷	双葉	八王子 新星			
神奈川		浦島丘 蒔田		西	港 川中島 戸塚	豊岡 平楽	
愛知				天神山	東港		
三重						崇広	
京都		嘉楽	北野	皆山 藤森 修学院 烏丸 朱雀 洛東	九条 西院 近衛 山科 陶化 高野 弥栄		
大阪				豊中一 岸城	生野二	大浜 春木	
和歌山						須崎	安原
兵庫			駒ケ林 灘	丸山 布引 大庄東	由良	太田	
広島	豊浜			観音 二葉			
福岡				東光			企救

注：判明している中で最も人数が多い年度を採用。

表34　1955年度以前の卒業生累計一覧（学校名は略称）

	200人	100人～	80人～	60人～	50人～	30人～	20人～	20人未満	なし
東京	足立四	曳舟	糀谷	八王子	双葉	新星			
神奈川		浦島丘	蒔田 西			港 戸塚 川中島		豊岡 平楽	
愛知			天神山			東港			
三重								崇広	
京都		皆山 嘉楽 藤森 烏丸 北野	朱雀	近衛 洛東 山科 九条	修学院 高野 陶化		西院	弥栄	
大阪				豊中一		岸城	玉津 大浜	春木	
和歌山						緑が丘	野上		安原
兵庫	住吉	駒ケ林 丸山	布引			由良 大庄東	大橋 太田 須佐野	東光 洲浜	
広島				観音 豊浜		二葉			
福岡				東光				松原	企救

注：複数の記載がある場合、多い方を採用。

古屋市等ではやや多く、三重県・大阪府では少ない。

第４に、奈良県・和歌山県の郡部に位置する学校、及び、福岡県の産炭地の学校は、在籍者数が40人未満と小規模であることが多い。特に和歌山県のそれは、在籍者20人未満と小規模だ。高知県は在籍者数が不明の場合が多いが、判明している安芸はやはり小規模である。卒業生の人数も不明なケースが多いが、判明している場合は10人未満と少なく、中には卒業生がいない学校もある。

ただし第５に、郡部には一部だが、極めて大規模な学校もみられる。和歌山県の御坊、広島県の豊浜、高知県の戸波、福岡県の宇美等は100人以上の在籍者を擁していた。豊浜では卒業生数も60人以上と多い。

そして第６として、兵庫県は生徒数が判明している学校は都市部のそれが多いが、その中でも大規模校から小規模校まで、多様な学校がみられる。総じて神戸市内に大規模校が、その他の地域にやや小規模な学校が多かったようである。生徒数が判明している数少ない郡部の学校は、やはり小規模である。

第６節　性別と年齢

生徒の性別・年齢も不明の点が多い。特に郡部の学校では、ほとんど不明である。

確認し得る範囲内では、性別は男女が拮抗している学校が多い（表35～37）。

ただしその中でも、製造業の集積地域では、男性が比較的多い。東京都の曳舟・糀谷・足立四・双葉、横浜市の浦島丘・豊岡・蒔田、名古屋市の東港、大阪府の玉津・豊中、兵庫県の大庄東・丸山、広島市の二葉・観音等が該当する。

一方、京都市では、女性の比率が高くなっている。

そして兵庫県は、在籍者の性別でもまた多様な構成の学校が見られる。

表35　在籍者の性別一覧（学校名は略称）

	男性		男女	女性	
	70%～	60%～	40～60%	60%～	70%～
東京	曳舟	糀谷 足立四 双葉	八王子・新星 立川三		
愛知	東港		天神山		
三重			崇広		
京都			皆山・近衛・嘉楽 朱雀・九条・高野 北野	修学院 藤森・陶化 洛東・烏丸	山科 弥栄
大阪	玉津		生野二		
和歌山		城南			
兵庫		大庄東	駒ケ林・丸山・布引 小田南・昭和・明倫	大社・灘	城内
広島		二葉	観音		

注：判明している中で最も在籍者数が多い年度を採用。

表36　卒業者の性別一覧（学校名は略称）

	男性		男女	女性	
	70%～	60%～	40～60%	60%～	70%～
東京	糀谷	曳舟 双葉	足立四	八王子 新星	
神奈川	浦島丘・豊岡 蒔田				
愛知		東港		天神山	
京都		高野 嘉楽 九条	皆山・陶化 藤森・朱雀 近衛・北野	修学院 烏丸 洛東	山科 弥栄 西院
大阪		豊中	大浜		
兵庫	大庄東・由良	丸山	布引		
広島	二葉	観音			
福岡		東光			

注：判明している中で最も在籍者数が多い年度を採用。

表37　卒業者累計の性別一覧（学校名は略称）

	男性		男女	女性	
	70%～	60%～	40～60%	60%～	70%～
東京	糀谷	曳舟	足立四・八王子 新星・双葉		
神奈川	浦島丘・豊岡	蒔田			
愛知		東港	天神山		
京都		嘉楽	皆山・洛東・藤森 九条・北野・近衛 朱雀・陶化・高野	修学院 烏丸 山科	弥栄 西院
大阪			豊中・大浜		
兵庫	大庄東・由良	丸山	布引		
広島	二葉		観音		
福岡			東光		

注：複数の記載がある場合、多数を採用。

年齢は、確認し得る限りでは、すべての学校で過半数が学齢者である（表38～40）。特に三重県崇広、大阪府岸城、兵庫県布引・小田南等では、学齢者が８割を越える。新制中学校の設立に伴い、そこでの不就学への対応として夜間中学校が生まれた以上、学齢の生徒が多かったことは当然であろう。

しかし、ここでむしろ注目すべきは、この時期の夜間中学校においても学齢超過の生徒が一定の位置を占めていたことである。特に東京都の多数の学校、及び、愛知県天神山、広島県二葉等では在籍者における学齢超過者が３～５割近くを占めていた。卒業者では東

表38　在学者における学齢者の比率一覧（学校名は略称）

	90%～	80%～	70%～	60%～	50%～
東京			八王子・双葉 曳舟	立川三 新星	糀谷 足立四
愛知				天神山	
三重		崇広			
大阪	岸城				
兵庫	布引・小田南	大庄東			
広島			二葉		

注：最も在籍者数が多い年度を採用。

表39　卒業者における学齢者の比率一覧（学校名は略称）

	50%～	40%～	30%～	20%～
東京	新星	八王子・糀谷	足立四・双葉・曳舟	
広島		二葉		観音

注：単年度で最も卒業者数が多い年度を採用。

表40　卒業者（累計）における学齢者の比率一覧（学校名は略称）

	70%～	50%～	40%～	30%～
東京	糀谷	新星	八王子	足立四・双葉・曳舟
広島				二葉・観音

京都・広島県の学校では多くの場合、学齢者は半数以下にとどまる。学齢超過者の多くは、20歳未満の若年層であったようである。

なお郡部の夜間中学校の生徒の年齢構成はほとんどの場合、不明である。断片的な記載からは、20歳以上を含む学齢超過者をかなり多く含んでいたケースがあることがうかがえる。

＊　本稿（前篇を含む）は、科学研究費基盤（C）「戦後日本の夜間中学とその生徒の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から」（2017～2020年）（研究代表者　浅野慎一）の助成に基づく研究成果である。

補注

1）《1950-1-93》、『神港新聞』1950年３月28日。《1953-10-494》も参照。
2）《1954-2-14》《1950-1-93》《1954-1-108》等。ただし、新聞名不明（1949年日付不詳）の記事「老先生と不就学児童　“返り咲く愛の教壇”」は２月１日、《1992-1-14》等は1949年10月、《1964-2》等は1948年。また《1994-1-46》は、1949年２月10日に「夜間学級」を始め、翌年、他校とともに夜間の不就学対策学級として神戸市教委に認可されたと記す。
3）《1958-1-4》。
4）《2010-1-1》。
5）《1960-3-25～26》。
6）前掲の「老先生と不就学児童　“返り咲く愛の教壇”」。
7）《1958-2-25》。
8）1949年が《1958-2-25》等、1950年が《1964-1-437》等。
9）1953年が《1964-1-437》等、1955年が《1958-2-6》等、1952年が《2000-1-113》《2004-1-117》等。
10）《1954-1-110》。
11）《1950-2》《1968-1-4》等。
12）１月16日が同分校「沿革」・《1950-2》《1968-1-3》等、１月15日が《1954-2-14》等、２月16日が《1966-3-9》等、1949年が《1989-2-23》等。
13）《1956-1》。
14）《1958-3-484》《1978-2》。
15）４月１日が《1954-2-14》等、４月10日は《1978-2》等。
16）開設日は、《1954-2-14》も参照。
17）《1964-1-437》。
18）《1975-1-1082》。
19）《1968-3-40・52》。
20）２月１日は《1968-3-25》《2010-2-2》等、２月７日は《1975-1-1083》等、４月１日は《1954-2-14》等。
21）1953年が《1964-1-437》等、1954年が《1975-1-1082》等。
22）《1997-1-21》《1964-1-437》等。《1975-1-1083》は1951年に「夜間学級」が開設されたとする。
23）《1964-1-437》。
24）《1957-2-11》。《1954-11-109》には「特別学級」、《1955-3-101》には「夜間特別学級」との表記がある。
25）《1957-2-11》《1964-1-437》。
26）《1954-6-1》
27）《1954-6-2》
28）４月１日は《1957-3-5》等、５月４日は《1975-1-1083》《1974-1-754》等、1951年が《1954-2-13》等。
29）《1954-6-1》。
30）《1954-7-78》《1975-1-1083》。
31）1951年４月は《1954-2-13》等、６月は《1976-1》《1975-1-1083》等。
32）《1974-1-757》。
33）《1954-7-78》《1975-1-1083》《1976-1》。
34）６月が《1954-2-13》《1976-1》等、11日が《2010-2-2》等。
35）《1974-1-757》。
36）《1954-7-1》。
37）４月が《1957-3-5》等、６月が《1954-2-13》《1976-1》等。
38）《1954-7-3》。《1975-1-1082》は卒業者数を「26～27年度計30名、以後不明」と記す。
39）《1954-7-78》《1975-1-1085》。
40）《1954-2-13》《1976-1》《1975-1-1085》。
41）《1960-1-42》。
42）５月21日が《1954-2-14》《1960-1-42》《1976-1》等、５月30日が《1975-1-1085》等、５月10日《1951-3-113》等。
43）1951年度は《1960-1-42》等、1952年度は《1952-1-119》、1953年度は《1954-2-14》。
44）《1954-2-14》。《1975-1-1085》は「特殊学校」。
45）《1954-2-14》《1975-1-1085》《1976-1》。
46）《1953-2-478》。
47）《2016-1-608》、『神戸新聞（西播版）』1952年11月６日。
48）《1954-2-14》《1975-1-1085》《1976-1》、『神戸新聞（西播版）』1952年11月６日。
49）《2016-1-609》も参照。
50）1952年度は《2016-1-609》、1953年度は《1954-2-14》。

51）《2016-1-609》。
52）『神戸新聞（西播版）』1952年10月３日。
53）『神戸新聞（西播版）』1952年10月３日、《1954-2-14》《1975-1-1085》《1976-1》。
54）1952年度は《1965-1》、1953年度が《1954-2-14》。
55）《1975-1-1085》、『神戸新聞（西播版）』1952年11月８日。
56）《1954-2-14》、『神戸新聞（西播版）』1952年11月８日。
57）《2010-2-2》は、1955年３月30日に廃止されたと記す。
58）《2016-1-609》も参照。
59）1950年5月が《1979-1-248》《2010-2-2》等、９月が《1957-3-6》等、1953年４月が《1975-1-1085》《1976-1》等。
60）《1956-2》。
61）《1975-1-1085》。
62）《1975-1-1085》《1976-1》。
63）《1975-1-1084》《1976-1》。
64）《1978-1-24》。
65）《1978-1-24》。
66）《1979-1-248》《2009-1-2》等。
67）設立経過については《1954-9-39》《1995-1-84～85》も参照。
68）《1954-9-39》。
69）４月１日は《1965-1》等、５月１日は《1954-2-15》《1990-2-452・702頁》等。《1965-1》は開設時の在籍者を44名と記す。
70）単年度の在籍者数は《1954-9-40》《1965-1》等も参照。
71）《1953-3》。
72）《1953-3-2》《1954-2-15》《1976-3-2》。《1965-1》は５月１日の開設日在籍者を69名と記す。
73）《1990-2-421・702》も参照。
74）単年度の在籍者は《1953-3-5》《1954-2-15》《1965-1》等も参照。
75）『中国新聞』（1955年９月９日）《2013-1-488》所収。後の時期の史料だが、《2015-1-554》は「夜間部」、《2013-1-488》は「夜間特別学級」と記す。
76）1月18日が《1954-2-15》《2015-1-553～554》等、５月１日が《1983-1-44～45》等、４月28日が《1965-2-6》等、６月１日が《1966-1-14》、７月が《1994-1-46》等。
77）《2013-1-488》所収。
78）《1979-2-76～77》《1966-2-77》等も参照。
79）《1988-1-95・134》《1967-2-155～159》《1987-1-198～199》等を参照。
80）1953年が《1989-1-12》、1949年が『朝日新聞（高知版）』1951年１月24日等。
81）安芸に開設された夜間中学で学んだ生徒に関する記事は、『高知新聞』2014年６月７日に確認しうる。
82）これ以外に、『高知新聞』（1948年11月28日）は、文教場閉鎖をめぐる紛争に際して高岡郡松葉川で不就学生徒をみかねて青年同志会が「寺子屋」を計画していると記している。
83）『高知新聞』（1951年１月19日）は、朝倉中学が同月18日、不就学生を完全に解消したと記している。
84）《1975-1-1086》。
85）1951年４月１日は《1965-2-6》等、６月１日は《1957-3-6》等、６月８日は《1954-2-16》等。
86）《1975-1-1087》。
87）《1954-2-15》。なお《1979-2-80》は開設を９月17日とするが、同書に掲載される夜間学級担任の記録を参照すると、17日以前から開設されていたと思われる。
88）５月１日が《1975-1-1089》、８日が《1954-2-16》等。《1953-4-8》は、1953年４月末に開設したと記している。
89）《1975-1-1087》。
90）２月７日は《1975-1-1087》等、８日は《1954-2-15》等。
91）《1975-1-1087》。
92）４月は《1954-2-16》等、５月１日は《1975-1-1087》等。
93）《1954-2-104》は、不就学生徒が「特定に限られた地方の村」であったと記す。

引用・参照史料目録

1950　1　神戸市立駒ケ林中学校学友会『こまが林　学友会誌創刊号・校舎移転記念号』
1950　2　無署名「西野分教場育友会結成趣意書」
1951　1　西宮市教育委員会「昭和26年度　教育委員会会議録」西宮現代史編集委員会『西宮現代史』第三巻（2004年）所収
1951　2　無署名「Ｓ26年頃　高知・戸波中学校夜間部について」
1952　1　無署名「不就学及長欠児童対策の近況」西宮市教育委員会事務局『教育時報』創刊号
1952　2　宝塚第一中学校「ジエーン颱風で中絶」『兵庫教育』４巻４号
1952　3　由良中学校「打開えの努力　希望学校」『兵庫教育』４巻４号
1953　1　神戸市立駒ケ林中学校「我校夜間特殊学級」神戸市教育委員会『昭和二八年度　特殊教育の研究収録』『同和教育史兵庫県関係史料』第三巻（1978年）所収
1953　2　兵庫県神崎郡神崎中学校甘地校「本校同和教育の歩み」兵庫県立同和研修センター・兵庫県同和教育史研究委員会編『兵庫県教育史兵庫県関係史料』第三巻（1978年）所収
1953　3　広島市立二葉中学校第二部『第二部学級の概要と実態昭和28年度』
1953　4　大牟田市教育委員会『教育大牟田』第１号
1953　5　神戸市立布引中学校「本校特殊学級生徒の生活環境実態（昭和二十八年十二月十五日調）」『同和教育史兵庫県関係史料』第三巻（1978年）所収
1953　6　神戸市立玉津中学校「（主題）特殊学級の指導について」『同和教育史兵庫県関係史料』第三巻（1978年）所収
1954　1　佐野繁太郎「本校の特殊学級（夜間学級）経営概要」
1954　2　文部省初等中等教育局・中央青少年問題協議会　『夜間に授業を行う学級をもつ中学校に関する調査報告書第１部　学校ならびに生徒の実態（昭和28年12月１日現在）』
1954　3　大牟田市教育委員会『教育大牟田』第４号
1954　4　「全国中学校夜間部教育研究協議会兵庫県支部結成の協議に関する案内」

1954 5 花園中学校「本校に於ける不就学生徒の実態」『昭和28年特殊教育の研究集録』『同和教育史兵庫県関係史料』第三巻（1978年）所収
1954 6 尼崎市立小田南中学校『不就学対策の一環として見たる夜間特殊学級の経営』
1954 7 尼崎市立大庄東中学校『夜間特殊学級の教育 特殊教育研究』第四集
1954 8 『第一回全国中学校夜間部教育研究協議会』
1954 9 門田宏「本校二部学級の歩み」『部落』51号
1954 10 広島市立二葉中学校生徒会社会科クラブ『二葉風土記』
1954 11 「花園中興を喜ぶ」神戸市教育委員会『神戸市教育時報』10号
1955 1 全国中学校夜間部教育研究協議会『第二回全国中学校夜間部教育研究協議会大会』
1955 2 全国中学校夜間部教育研究協議会『参考資料』
1956 1 神戸市立丸山中学校西野分校「西野分教場委託生一覧表」
1956 2 佐藤節夫（洲本市立由良中学校教諭）「本校夜間学級六カ年の歩みと現生徒の実態」
1956 3 「不就学生徒への考慮」神戸市教育委員会『神戸市教育時報』14号
1957 1 神戸市立丸山中学校西野分校「特殊教育－夜間学級の経営」『同和教育史兵庫県関係史料』第三巻（1978年）所収
1957 2 神戸市立花園中学校『創立10周年記念　花中のあゆみ』
1957 3 全国中学校夜間部教育研究協議会・横浜市公立中学校長会『夜間学級の実態』
1957 4 福岡市立東光中学校「全国中学校夜間中学教育研究協議会発表要項」
1958 1 伊藤泰治「夜間中学の二つの源流と三つの型」全日本中学校長会編『中学校』
1958 2 神戸市立大橋中学校『10周年記念誌』
1958 3 神戸市立布引中学校「本館竣工創立十周年記念誌」『同和教育史 兵庫県関係史料 第三巻』（1978）所収
1960 1 高木忠彦「廃止直前まできた努力」兵庫県教育委員会『兵庫教育』第12巻9号
1960 2 畑琢郎 岩屋中学校長「漁町にうまれた特別学級・夜間学級」『兵庫教育』第117号
1960 3 佐野繁太郎「夜間学級の問題点」神戸市愛護教育連盟『愛護教育』
1960 4 宇美中学校「通学区域と性道徳の問題」『第７回全国夜間中学校研究協議会大会要項』
1963 1 田中勝文「『夜間中学』の問題」『教育』13(2)
1963 2 兵庫県教育史編集委員会『兵庫県教育史』兵庫県教育委員会
1964 1 神戸市教育史編集委員会『神戸市教育史』第二集
1964 2 無署名「夜間中学校生徒数変遷資料」
1965 1 専修大学学生会教育研究会『夜間中学』
1965 2 全国夜間中学校研究会『第12回全国夜間中学校研究大会大会要項』
1966 1 東洋大学社会学研究会『昭和41年度　全国夜間中学生実態調査』
1966 2 尾形裕康・長田三男『戦後におけるわが国勤労青少年教育の研究』
1966 3 全国夜間中学校研究会『第13回全国夜間中学校研究会大会要項（資料）』
1967 1 尾形利雄・長田三男『夜間中学・定時制高校の研究』校倉書房
1967 2 広島県公立中学校長会『広島県公立中学校20年のあゆみ』
1968 1 神戸市立丸山中学校西野分校『西野分校のあゆみ』
1968 2 玉本格「番町同和地区と訪問教師制度」『第15回全国夜間中学校研究大会要項・研究資料』
1968 3 神戸市立太田中学校『創立20周年記念　おゝた』
1969 1 神戸市立丸山中学校西野分校「本校の誕生とその後の変遷」『第16回全国夜間中学校研究会大会資料・要項』
1970 1 玉本格「未解放部落と夜間中学校」神戸市立丸山中学校『同和実践』第１号
1970 2 全国夜間中学校研究会『第17回全国夜間中学校研究大会大会要項・研究資料』
1970 3 西宮市教育委員会『西宮市戦後教育史』
1971 1 上田喜三郎「夜間中学の歴史」『教育』21(3)
1971 2 広島県教祖・県教育白書編集委編『71'広島県教育白書シリーズ No.2　学校教育とマスコミ文化』
1972 1 加藤実「夜間学級の誕生」姫路市立灘中学校育友会『創立25周年記念誌　灘』
1972 2 高知県教育史編集委員会『戦後高知県教育史』高知県教育委員会
1974 1 尼崎市教育委員会『尼崎市戦後教育史』
1975 1 無署名『ルンプロ元年　父母の歴史を受けつげ仇打ち連続射殺魔永山則夫の「私設」夜間中学』
1975 2 神戸市立丸山中学校西野分校「西野分校（夜間中学）のあゆみ」『同和教育史 兵庫県関係史料 第三巻』（1978）所収
1975 3 神戸市立丸山中学校西野分校「公文書による在籍者数の推移」
1976 1 東京都夜間中学校研究会総務部・史料室　松崎運之助「昭和51年度　第22回全国夜間中学校研究大会第二分科会　夜間中学の歴史に関する諸問題」
1976 2 東京都夜間中学校研究会資料室「昭和51年度第２回都夜中研大会発表 全国夜間中学校開設廃止一覧」
1976 3 広島市立二葉中学校『昭和50年度　学校要覧』
1977 1 神戸市立丸山中学校西野分校「在籍者数」（手書き）
1978 1 沼島中学校編集委員会『沼島中学校創立30周年記念誌』沼島中学校同窓会
1978 2 神戸市立布引中学校『30周年記念』
1979 1 兵庫県立同和研修センター・兵庫県同和教育史研究委員会『同和教育史兵庫県関係史料　解説』
1979 2 松崎運之助『夜間中学　その歴史と現在』白石書店
1980 1 広島市立二葉中学校『学校要覧　昭和55年度』
1983 1 広島市中学校教育研究会夜間学級部会編『広島市立中学校　夜間学級30年のあゆみ』

1986　1　神戸市立丸山中学校西野分校「本校夜間学級の概要」
1987　1　広島県公立中学校長会『中学校教育四十年』
1988　1　広島県公立中学校長会『中学校教育三十年』
1989　1　近畿夜間中学校連絡協議会事務局『夜間中学から』
1989　2　全国夜間中学校研究会『第35回全国夜間中学校研究大会大会資料』
1990　1　近畿夜間中学校連絡協議会「第36回全国夜間中学校研究大会　第4分科会　夜間中学校増設運動」
1990　2　広島市教育センター『広島市学校教育史』
1992　1　江戸川区立小松川第二中学校夜間学級『夜間中学の記録』No.22
1994　1　東京都夜間中学校研究会「全国夜間中学校の歩み　略年表」全国夜間中学校研究会・関東地区大会実行委員会『第40回全国夜間中学校研究大会大会資料』
1995　1　「夜間学級、開設から今日まで」全国夜間中学校研究会・広島地区大会実行委員会『第41回全国夜間中学校研究大会大会資料』（広島市立中学校夜間学級『40年の歩み』より）
1997　1　神戸市立住吉中学校『住吉　創立50周年記念』
1997　2　神戸市教育委員会・神戸市立中学校長会『神戸市立中学校　創立50周年記念誌』
1997　3　市川町立市川中学校『市川中学校設立50周年記念誌』『広報いちかわ』No.528（2013年）所収
2000　1　『第46回全国夜間中学校研究大会 大会記録誌』
2004　1　第50回全国夜間中学校研究会大会実行委員会『第50回全国夜間中学校研究大会記念誌』
2009　1　第55回全国夜間中学校研究大会実行委員会大会事務局『神戸市夜間中学校60年をふりかえって］
2010　1　末吉富久男「近畿夜間中学校研究協議会30余年を振り返って」第55回全国夜間中学校研究大会実行委員会大会事務局『神戸市夜間中学校六十年をふりかえって』
2010　2　第55回全国夜間中学校研究大会実行委員会大会事務局『神戸市夜間中学校60年をふりかえって』
2013　1　豊浜町史編さん委員会・呉市編さん委員会『豊浜町史資料編』
2015　1　豊浜町史編さん委員会・呉市編さん委員会『豊浜町史通史編』
2015　2　江口怜「1950年台の和歌山県における部落子ども会と夜間学級」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』(41)
2016　1　姫路市史編集専門委員会『姫路市史』第六巻・本編・近現代３
2017　1　横関理恵「戦後における中学校夜間学級の成立過程」『教育学の研究と実践』第12号

追記：本稿入稿後、江口怜「夜間中学の成立と再編」木村元「日本における学校化社会の成立」日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書が刊行された。そこでは、本稿で取り上げた学校以外に、富山県・滋賀県・奈良県・和歌山県・大阪府・兵庫県・広島県・福岡県等において、従来は明らかにされていなかった夜間中学の存在が新たに確認・紹介されている。